［プロローグとエピローグのある二幕］

輝く闇の　沼の乾き

桶谷忠平

登場人物

屁垂れの九平太

山上憶良

大伴旅人

近江の家麻呂

その妻

中臣君足

山の井

行基

茨木

伊吹の弥三郎

伊吹童子

衛士達

その他

プロローグ

闇の舞台に、生首が一つ転がっている。生き埋めにされた弥三郎の首である。

旅装をした家麻呂が松明を掲げて登場。失意のうちに故郷に戻る途中で、気の重さが旅の脚を遅くさせ、夜旅にかかってしまった。夜旅の恐ろしさに、気もそぞろで歩を進めている。

生首の目がカッと見開かれる。目が蚊の動きを追って鼻の頭に寄り、大きなくしゃみを一つ。飛び上がる家麻呂。

弥三郎　やい、旅人。

家麻呂　（驚いて）わぁー、誰だ・・・。（逃げかける）

弥三郎　俺だ。逃げるな。

家麻呂　命ばかりはお助けを・・。

弥三郎　助けて貰いたいのは、俺のほうだ。

家麻呂　ご冗談を・・・。あ貴方様は、もしや、追剥ぎ様で・・・。

弥三郎　危害は加えぬ。もっとこっちへ来い。

家麻呂　（松明で辺りを窺いながら）どちらで御座いますか、お姿が見えませぬ。

弥三郎　もっと左だ。何故右に行く。

家麻呂　左だ、右だと仰っても、貴方様から見ての右左でしょうか、それとも私めか

ら見ての・・・。

弥三郎　ええぃ、喧しい。俺様から見てに決っているじゃねえか。

家麻呂　此れはまた乱暴な。

弥三郎　つべこべ言うない。さっさと来やがれ。

家麻呂　来いと言われても姿が見えませぬ。もしや、物の怪、鬼神の類では有りませんか。（独白）まさかこの辺りに隠れ棲む鬼が、捕って喰おうと言うのではあるまいな。桑原（くわばら）、桑原。

弥三郎　ちぇ、何を言いやがる、正真正銘の人間様だわ。

家麻呂　そう言っても姿が見えませんぞ・・。

弥三郎　もっと下だ、下を見ろ。

家麻呂　下と言いますと・・・（松明で辺りを照らして、足元の首に気付く）わぁーあー、くび、くーびーだー。（腰を抜かす）あわ、あわ、生首が口を利いた・・・おたすけ、お助け・・・。

弥三郎　騒ぐんじゃねえ、落ち着いてよく見ろ。

家麻呂　くび、首が喋ってる。化け物だ・・。

弥三郎　首だけが喋ってるんじゃねえ、体が土ん中に埋まってるんだ。火をこっちに寄越してよく見やがれ。

家麻呂　（恐る恐る松明を近付けて眺める）成る程、首から下が土の中だ。

弥三郎　それ見やがれ、分かったか。分かったらこっちに来て、掘り出してくれ。

家麻呂　本当に人間なのですね・・近くに行ったら突然赤鬼に成って喰らいつくなん

てのは嫌ですよ。

弥三郎　疑り深い野郎だ、食いついたりしねえから早く掘り出してくれ。

家麻呂　（独白）自分から埋まる訳はないのだから、誰かに埋められたに違いない。そいつが見ていて、余計な事をするなってんで・・・（弥三郎に）係わり合いに為りたくありません。誰か人を呼んできます。

弥三郎　何をぐずぐずしてやがる。さっさと掘り出さねえと、酷い目に遭わすぞ。逃げようなんぞとしてみろ、国中追いかけて、何処に隠れようと、必ず見つけ出して締め上げてやる。

家麻呂　分かりましたよ、嚇(おど)かさないで下さい。だが、掘り出す道具を探さないと・・。

弥三郎　奴等が穴を掘った棒がその辺に在る筈だ。

家麻呂　（辺りを探して）ああ、有りました。今、掘りますから待ってて下さい。（弥三郎の周りを掘り始める）

弥三郎　い、痛てえ。気をつけやがれ。

家麻呂　暗くて見えないんだ。我慢してください。

弥三郎　不器用な野郎だ。

家麻呂　文句を言うんなら、止めたっていいんですよ。

弥三郎　そいつは済まねえ。文句は言わねえから続けてくんねえ。

家麻呂　こんな風に埋められるには、それなりの訳が有るんでしょうね。

弥三郎　そりゃあ、訳は在るさ。

家麻呂　どんな訳ですか・・。

弥三郎　聞きたいか。

家麻呂　ええ、聞きたいです。

弥三郎　よし、掘り出してくれる駄賃に聞かせてやろう。俺はな、これでも土地じゃあ一寸名の知れた暴れ者でな、悪さを遣りすぎて土地を追われたと思いねえ。

家麻呂　はい。

弥三郎　仕方がねえんで、旅に出たのよ。あっちへ二日、こっちへ三日と仲間内を泊まり歩いていたんだが、ある村で長者の娘を見初（みそ）めちまった。どうしてもその娘が欲しいってんで、長者の家に談判に行くと、長者の野郎いやに物分りのいい素振りしやがって、酒は出すわ、喰いもんは出すわで持成すじゃねえか。こっちも嫌いじゃねえから、ぐいぐい飲って不覚にも酔いつぶれちまった。そしたら、村の若い者んが出てきやがって、ぼこぼこにされちまった。挙句の果てが縄でぐるぐる巻きにされてこの始末だ。

家麻呂　敵が一枚上手だった訳ですな。

弥三郎　妙な処で感心するない。あの長者の野郎、徒（ただ）じゃ置かねえ。これから夜道を駆けてぎゅと言う目にあわせてやるぞ。おい、手が留守だ。

家麻呂　すいません。つい話しに気を取られてしまって・・・。でも、もう此処まで掘れましたから・・。

弥三郎　よし、手を入れて縄を解いてくれ。

家麻呂　こいつは固く縛ったもんだ。（縄を解いて）どれ、此れで解けた。

弥三郎　忝ねえ。（もがき出ようとするが、中々上手く出られない）おい、手を引っ張

ってくれ。

家麻呂　（手を引きながら）どれ、よいしょ、うーん、どっこいしょ。

弥三郎　（穴から這い出て）やれやれ、やっと出られた。（背伸びをし、体の節々を動かしながら）何処も骨は折れていないようだ。（鼻の頭を掻きながら）藪っ蚊が多くて往生したぜ。（両手で蚊を打ちながら）はーっくしょい、また、鼻の孔に潜り込みやがった。

家麻呂　それにしても熊みたいな手だ。

弥三郎　そりゃそうだ、熊と素舞（すまい）を取った手だ。

家麻呂　熊と素舞を取った・・。本当ですか。

弥三郎　本当だわな。俺は、髪も歯も生え揃って産まれた為に、鬼の子と言われて伊吹の山に棄てられたんだ。棄てた親は、山の獣に喰われて死ぬと思ったに違いないが、如何した事か山犬や熊が俺を育てて呉れて、物心ついた頃には熊と素舞を取っていたんだ。

家麻呂　それはまた、豪儀な話ですな、熊に育てられたとは・・。そうだ、お名前を聞かせて貰えませんか。

弥三郎　俺が名か・・。

家麻呂　はい、熊と素舞を取った話など聞いた事がありません。是非名前を覚えて置きたいのです。

弥三郎　俺が名前は、弥三郎。伊吹の弥三郎って言うんだ。

家麻呂　えぇーっ、それではあの有名な・・・・。

弥三郎　そうよ、伊吹の御山で、鬼と恐れられた弥三郎とは俺がことだ。

家麻呂　そ、それでは貴方さまがあの・・人を攫(さら)っては生き胆を喰うと言う・・。

弥三郎　驚いたか。

家麻呂　どうかお助けください。私の生き胆など固くて旨くない筈です、命ばかりはお助けを・・・・。

弥三郎　助けてくれたお前の命を取ろうとは言わぬ。だがな、替わりに俺の頼みを聴いてくれ。

家麻呂　何でも仰る通りに致します、ですからどうか命ばかりは・・。

弥三郎　（凄みのある声で）都の丑寅(うしとら)の外れに大きな沼がある。その沼の辺に酒を飲ませる店があって、主で九平太と言う男が居る筈だ。

家麻呂　九平太・・。

弥三郎　そうだ。その男に伝えて欲しい、「伊吹童子が都に行く」とな。

家麻呂　「伊吹童子が都に行く」と、九平太と言う男に言えと・・・。

弥三郎　そうだ。

家麻呂　（独白）家に帰ろうと此処まで急いで来たのに、また、都に引返すとは難儀な事だ・・。

弥三郎　何か言ったか。

家麻呂　いえ、此方の事で。

弥三郎　必ず伝えろ。逃げようなんぞと言う魂胆(こんたん)を持つといけないから背中の荷物は預かって置く。

家麻呂　えっ、此れは勘弁して下さい。都で三十年勤めてやっと貯めた全財産です。これがないと故郷（くに）の家に帰れません。

弥三郎　だから預かるのだ。盗りはしない、言われた用を済ませれば返してやる。

家麻呂　此れだけは勘弁して下さい。手ぶらで家に帰ったりしたら、女房に殺されちまう・・。

弥三郎　用さえ済めば必ず返してやる。俺も伊吹の弥三郎だ、約束は守る男だ。行け。

（大きなくしゃみをする）。

暗転。

第一幕　一場

都の外れ、沼の辺の酒肆（しゅし）、曖昧宿（あいまいやど）も兼ねている。暑い盛りの昼下がりである。上半身裸で、何故か烏帽子を被った侭の旅人と憶良が酒を飲みながら双六を打っている。沼から湧く蚊を煩（わずらわし）げに手で払っている。傍（かたわ）らでしどけない格好の山の井が所在なげにしている。

生塵の桶を提げた九平太が、裏から現れ、塵を沼に投げ入れる。そこに、巡邏する六衛府の衛士達が登場する。

衛士　　おい、親爺。

九平太　　へえ。

衛士　　最近、この辺りに見かけぬ顔が増えておらぬか。特に、陽に焼けてひもじそうな顔をした奴等だ。山沢亡命（さんたくぼうめい）の徒と言ってな、田畑を捨て、野や山に逃散（ちょうさん）した奴等が浮浪人となって都に流れ込んでおる。

九平太　　さようで・・・。

衛士　　それにな、伊吹の山に巣食う鬼どもが山を降りたとの知らせがあった。都に潜入して悪さを働くやも知れぬので、見付け次第捕縛せよとのお達しだ。不穏な動きや怪しい噂があったら直ちに注進に及べ。

九平太　　（気の無い返事をする）へえ。

衛士　　頼りない親爺だ・・。

衛士は、じろりと店の中を覗き込む。憶良達は、何気ない素振りで顔を背ける。

衛士　良いな、必ず知らせるのだぞ。

九平太　へえ。

衛士達は退場する。

九平太　ちぇっ、役人め。威張りくさりやがって・・。

九平太は放屁をして、裏に戻っていく。

憶良　ああ、こりゃこりゃ亭主殿。蚊が酷(ひど)い。打っても打っても湧いて来る。蚊燻(かいぶ)しを遣ってくれぬか。

山の井　そんな言い方じゃ、聞えやしないよ。それに、ここじゃ、蚊燻しは夕方、お天道様が沈む前と決ってるのさ。それ以外の時間にゃ遣っちゃあ呉れない。

憶良　それにしても、蚊が酷い。

山の井　蚊は此処(ここ)の名物さ。

旅人　名物と言えば、此処の酒は旨い。亭主に言ってもう一升ばかり持たせてくれぬか。

山の井　あいよ。(立ち上がって、奥へ消える)

憶良　確かに、此処の酒は旨う御座いますな。吉備の豊酒にも較べられましょう。それに、このような処で澄み酒を出すこと自体が珍しゅう御座います。

旅人　濁り酒も、それはそれで味わい深いが、やはり酒は澄み酒が勝る。此処の酒は、確かに吉備の豊酒にも勝るかも知れぬな。

憶良　これはこれは、中納言様ほどにお口の肥えた方に、其処までお褒め頂くとは。

旅人　中納言様は止めぬか。折角、忍んで参っているのだ。身分が顕(あらわ)れては、楽しみが半減する。此処は人の世には非ず、岡場所だ。官位も衣も脱ぎ捨てて、思いっきり楽しむのだ。裸じゃよ、裸。

憶良　此(こ)れは申し訳ないことで。気を付けまする。

旅人　それそれ、その言葉使いも改めねばな。全て下世話に、下世話に。

憶良　重ね重ね申し訳御座りませぬ。

旅人　（笑いながら）ますます悪くなるわ。

山の井が、酒の入った壷を持って登場する。

山の井　（壷を憶良に渡しながら）二十文だってさ。

憶良　二十文・・。

山の井　高い酒さ。米二升五合と同じ値だ。（憶良から銭を受け取りながら）こんな高い酒を飲むなんて、あんた達は余程の金持ちか悪人に違いない。（笑いながら）でも、それって同じ事か。（銭を確かめながら）それとも、最近は贋金造りが流行っているそうだが、お前さん達はそのお仲間かい。

憶良　贋金造りとは無礼な、この方をどなただと心得ている・・・。

旅人　これこれ、今申したばかりではないか、名を明かしてはならぬぞ。

山の井　どこぞの身分あるお方だと言うんだろうが。名乗らなくったって大方の事は分かっているさ。中納言様のお忍びだって見当かい・・・。

憶良　これはしたり、どうして分かった。

山の井　あたしゃ、客を見るのが商売さ。馬鹿にしちゃいけないよ、あんた達の正体が見通せなくてどうする。身分を偽って、こんな所で遊ぼうって言う物好きは、結構多いのさ。でも、ほんとの中納言様かい・・・。

旅人　そうとも。ばれていては仕方が無い。だがな、此処に居る間はどこぞの物好きな俄か分限者（にわぶげんしゃ）とでもして置いてくれぬか。

山の井　いいとも、此処は身分なんてものが通用する場所じゃないし、下手にばれりや、暗いところでずぶりときて身包（みぐる）み剥（は）がれるて事だってある処だ。

憶良　嚇（おど）かすではないか・・。

山の井　こりゃあたしが悪かった。此処は憂き世を忘れて楽しむ場所だものね。楽しけりゃ良いのさ。

旅人　さよう、さよう。憂き世を忘れて楽しむに限る・・。

山の井　験直（げんなお）しに、あたしにもその酒一杯恵んでくれないか。

旅人　よいとも、よいとも。（酒を注いでやる）さあ、やってくれ。

山の井　こんな高いお酒は、あたし等の口には滅多に入らないのさ。此処だって表向きは澄み酒は売ってはいけない事になってるんだから・・。

憶良　此処の亭主は何処（どこ）から仕入れているのだ。

山の井　これはね、内々の話だけど、河内の餌香の市に手を回して運ばせているらしいよ。（飲み干して）ああ、美味しかった。ご馳走様。おや、お客だよ。

笠で顔を隠して、辺りを気にしながら、君足が登場する。近付いてしなだれかかる山の井。話を中断して、透かし見る旅人、憶良。

山の井　いらっしゃい。お遊びかい・・・。

君足　しぃーっ。（辺りを気にして、黙るように身振りで指示する）

山の井　おやまぁ、あんたもお忍びかい。分かりましたよ、さあさあ、此方（こちら）へ・・・。

君足と山の井は、縺（もつ）れ合いながら奥へ消える。

憶良　どこぞで見たような顔で御座います。

旅人　ほれ、あの男よ。密告で左大臣長屋王様を自殺に追い込んだと言う・・・。

憶良　「左大臣は密かに呪術を学びて、国家を傾けんと欲す」と帝に密告した男・・。

旅人　そのお陰かどうかは知らぬが、並みの者であれば百年はかかると言う出世の階段を一気に駆け上がったと言うではないか。

憶良　そう言う事もあるので御座いますな。

旅人　これ、羨ましそうな顔をするな。それにしても、可哀相なは左大臣だ。父上は天武の帝の御子だが、母方が卑しい身分の出と言う事で冷遇され、中年を

過ぎてやっと左大臣として陽の目を見たら、謀反の罪を被せられて自殺に追い込まれてしまった。

憶良　骸（むくろ）は野に棄てられ、焼かれて灰となった骨は河に流されたと聞きます。

旅人　惨（むご）いものだ。お陰で、左大臣の魂魄（こんぱく）は此の世に留まり、悪霊と為って魑魅魍魎（ちみもうりょう）を呼び寄せ、夜な夜な妖しの者となって巷に現れると言うぞ。身分ある者の家が一軒潰れれば、幾十人という家司、召使が職を奪われる。まして、左大臣家とあれば、親族一統を含め数百人が路頭に迷わねばならぬ。それらの者の怨念が凝（こ）れば余程の人魂となろう。

憶良　それもこれも、右大臣藤原様の娘を皇后に差し出そうとしたのに反対を唱えたのが原因とか・・・。

旅人　いやいや、皇后の上に大夫人と言う新しい称号を設け、これに娘を据えようとしたのだ。これには左大臣がおおいに反対してな・・。

憶良　なるほど・・。

旅人　実はこの件には、儂も左大臣に味方して密かに動いたのだ。それが、どうもばれたようで最近睨まれておる。これからは、藤原一族の天下になるぞ。あの男には近寄らぬ方が良い。見なかった事にしよう。

憶良　左様で御座います。触らぬ神に祟り無しで御座います。（何事も無かったように）しかし、この壷はどうも伊部の窯で焼かれた壷のようだから、もしかすると吉備の酒そのものかも知れませぬぞ。（二人は、話しながら首を伸ばして、そっと奥を覗く。顔を見合わせて頷き合うと元に戻る。）

旅人　確かに伊部の壷のようではある。伊部と言えば吉備に近い。しかし、このような処で吉備の酒が飲めるとは思えぬ。吉備の酒と言えば、吉備の酒に事寄せて歌を寄越した女子がおったな。

憶良　これはお安くありませんな。

旅人　酒と言えばこう言う歌はどうじゃ。「酒の名を　聖と負せし　古の　大き聖の言の宜しさ」。

憶良　魏の太祖が禁酒令を出された時の故事にならったお歌ですな。

旅人　流石（さすが）じゃ。よく分かったな。酒を聖人に喩えた古の人の故事に因んで、その見事さを歌ってみた。

憶良　見事なお歌で御座います。深みといい、雅趣といい、唐の詩に匹敵しますな。

旅人　そうだな、唐の詩は良い。唐の詩には教えられる事が多い。それに較べ、我が方の歌は近頃どうも暮らしの些事を伝える道具に成り下がった観がある。おおらかさも風雅さも無くなって来ている。歌を作る時でもそうだ、屋敷の奥に篭（こも）ってこそこそと創ったような歌が多くなった。そのような風潮は改めねばならぬ。そこへいくと唐では、同好の士が一夕、花の下に集い酒を酌み交わし、興の赴くまま詩を吟じ合う宴を催すそうではないか。良いな、そうゆう雰囲気好きだ。

憶良　私が、唐に居りました頃は・・・。

旅人　そうであった、お主は遣唐使の一員として唐に渡ったのであったな。

憶良　はい。

旅人　うらやましいかぎりだ。儂も一度彼の地に渡って、優れた文物を見聞したいものだ。

憶良　彼の地では、乞食坊主までもが詩を創ります。私が居りました時、長安の巷で流行っておりましたのが王梵志の「貧窮田舎漢」ですな。

旅人　ほう、どんな詩だ。

憶良　一人の貧しい百姓がおりまして。畑仕事の苦しさ、働けど働けど餓える暮らしに泣く子供。それでも容赦なく税を取り立てに来る役人。そんな貧しい暮らしでも、子に勝る宝はないと言う家族への愛。まあ、そういった詩で御座います。

旅人　貧乏の歌か・・・。

憶良　はい。

旅人　そんなものを詩にしてよいのか・・・。

憶良　私も戯れにそのような歌を作ってみました。

旅人　お主も創った・・・。

憶良　はい。恥かしながら、私、此の頃若い娘と懇ろ(ねんご)になりまして・・・。

旅人　これはこれはお盛んな事だ。

憶良　実はこの娘、我が家の端下女をしておりまして、ひょんな拍子に手を付けてしまいまして・・・。娘が親に会ってくれろ申しますので仕方なく出掛けてみますと、これが誠にみすぼらしい暮らしで、赤貧洗うが如しと謂いますが、小屋と言うよりはあばら家でして、雨は漏る、雪は吹き込む、床は無くて、

土間に藁を敷いて子供達が寝ておりましてな。これはまた子供が多い、貧乏人の子沢山と申しますが、あれは本当ですな。両親が持成(もてな)しの積りでしょうか、酒粕を更に絞ったような酒を出して来ましてな。肴も無い。肴の代わりに粗塩を嘗(な)めろと申します。この時、脳裏を「貧窮田舎漢」が過りまして、詩興が湧きました。「貧窮問答歌」と名付けようと思っております。

旅人　うーむー。

憶良　しかし、役人とはえらい者ですな。唐も我国も同じで、そんな貧しい家からも容赦なく税を取り立てようとします・・・。

旅人　・・いかんな、そのような歌を世に問うてはならぬ。

憶良　何故で御座いましょう・・戯れの歌で御座います。

旅人　戯れでも危険だ。政事の在り様を批判していると思われかねない。お主も知っての通り、最近、山沢亡命の民と言うのが世情を騒がせて喧しい。坊主姿で邪教を唱え、逃亡、逃散した農民どもを集めては、修行と称して山野に隠れ、密かに此の世の転覆を謀っている者達じゃ。新しい土蜘蛛の一種だな。この歌はそれらの輩に利用されぬとも限らぬぞ。藤原一族は土蜘蛛の類には容赦はしない。たとえ利用されなくても、そのような疑いを持たれただけでお主の望んでいる国司任官を危うくする。長屋王が失脚して以来、最早この世は藤原一色だ。藤原の色に染まるか、染まらぬかで全てが決まる。体制批判など持っての他だ。

憶良　右大臣藤原様に睨まれる・・・それは困ります。

旅人　そうであろう。時を待った方が良い。時が必要とすれば、自ずと世が認めてくれるものだ。

憶良　分かりました。・・それで、国司の件ですが、如何なものでしょう。何か良い便りは聞かれませんでしょうか。

旅人　儂もこれはと言う筋には話を繋いでおるが、此ればかりはなかなか・・・。

憶良　都から遠い、格の下がる下国でもかまいませぬが・・・。

旅人　お主も知る通り、我国は六十六国、従って国司の数も六十六人。今年の欠員はその内僅かに七人じゃ。此れに対して資格のある五位の者は軽く百人を超える。皆必死じゃ。

憶良　私が大宝元年に遣唐少録に任じられて唐に渡りましたのが四十の時。帰国致しまして、従五位下に叙せられたのが五十も半端。最早六十を過ぎました。然るに、未だ任官の目処（めど）が立ちません。

旅人　厳しい時代だのう。成り手ばかり多くて、待つ間に皆歳をとりおる。

憶良　私と同じ時に従五位下に叙せられた者の内、六名は既に位も上がり国司として任地へ赴いております。

旅人　確かに。お主のように才能が有りながら出世の遅れている者もおれば、世渡り上手に泳ぐ者もおるであろう。だがな、やはり似たり寄ったりの年恰好の者が多い。その歳で辺鄙な田舎暮らしは切ないと思うが、皆成りたがりおる。

憶良　国司は、我等がような五位どまりの者にとりましては望みうる最高の職で御座います。

旅人　やはり一国一城の主じゃものな、旨味のある役職ではある。

憶良　旅人様が頼りで御座います。何卒、お見捨てなく、宜しくお願い申しあげます。

旅人　こう言う事は、焦らず、慌てず、諦めずじゃ。

憶良　しかし、子が産まれました。

旅人　えっ、子が産まれたと・・。先程の娘に子が出来たと申すか。やるもんだの。何処からそんな力が湧いて出るものだか・・。

憶良　何としても職につかねばなりませぬ。

小さな笊を持って九平太が登場する。

九平太　するめを焼いたが、喰らうかね。

旅人　おう、貰うぞ。

九平太　（笊を渡しながら、放屁する）これはご無礼。

旅人　いやはや、これは臭い。

九平太　今日はちと気合が入っておりまして、たて続けに出やがるので御座いますよ。

（再び放屁する）

憶良　叶わぬ、叶わぬ。勘弁してくれ。

九平太　（放屁）出物腫れ物ところ嫌わずと申すではありませぬか。（放屁）そのするめは浪速（なにわ）から送られた物、正午に西の市が開くと同時に買い求めて参りまし

た。旨いするめで御座います。

旅人　しかし、そう処構わずでは喰う気も起こらぬ。

九平太　そう仰るが、屁も立派な技で御座いますよ。あまり立派な屁をひるてえんで、方々の屋敷から招かれて、家も建て、女房子供も養っている男が居るそうだ。

（放屁）やはり、都で御座いますな、色々な事があるもんだ。

憶良　それは結構な事だが、しかし、此処では遠慮して貰えぬか。

九平太　はいはい、気をつけまする。（放屁）これはこれは、ご無礼、ご無礼。平にご容赦下さりませ。

日焼けして、筋骨隆々とした行基が登場。埃に塗(まみ)れた破れ黒衣を身に纏っている。

旅人、憶良は、するめを肴に酒を酌み交わし始める。

行基　おう、やっておるな。一町先から臭うぞ。誰が名付けたか知らぬが、屁垂れの九平太とは良く言ったものよ。

九平太　乞食坊主が何の用だ。

行基　何の用だは無かろう、此れでも客だぞ、屁垂れ殿。

九平太　客が聞いて呆れる。客は銭を払う者だ。

行基　銭は無いが、有難い徳は有り余っているぞ。お前の後生(ごしょう)を願って念仏をあげてやろうか。

九平太　縁起でもない、ご免蒙る。そんなでかい身体で店先を塞(ふさ)いで貰っては迷惑だ。

さっさと行ってくれ、ご無用、ご無用。

行基　そう冷たい事を言うな。坊主に優しくするのも功徳だぞ。この暑い最中、こないだの大水で流された橋を懸け直しているのだ。喉が渇いて叶わぬ。どうだ、一杯喜捨（きしゃ）してくれぬか。

九平太　坊主の癖に、橋を懸けたり、道を造ったり、まるで土方ではないか。

行基　世の為人の為じゃ、坊主と言えど念仏ばかりではないのさ。それはそうと、どうだ一杯。

九平太　昼間から坊主が酒を呑んで良いのですかい。

行基　酒ではない、暑気払いの薬湯だ。それにもう日も傾きかけておる。

旅人　亭主、亭主。

九平太　へえ。

旅人　其処の優婆塞（うばそく）を此方へお呼びしてはくれぬか。

九平太　何か御用でも・・。

旅人　いやいや、外でもない。かなり喉がお渇きとお見受けする。失礼でなければ一献差し上げたいと思ってな。

行基　これはご奇特な。失礼などと言う事は微塵（みじん）も御座らぬ。（二人の所へ寄って）遠慮なく頂戴いたします。（杯を受け取って）おっ、これは澄み酒ですな、豪儀だ。南無頓証菩提（なむとんしょうぼだい）、頓証菩提。（飲み干して）いや、甘露（かんろ）、甘露。

憶良　見事な呑みっぷり。余程お好きとみえる。

行基　（頭を掻きながら笑う）

旅人　亭主、酒の代わりじゃ、酒を持て。

九平太　へえ。（奥に向って、怒鳴る）おい、澄み酒のお代わりだ。

旅人　ところで和尚、坊様が橋懸けの手伝いとは珍しい。

行基　手伝いでは御座らぬ。拙僧が音頭を取り申す。（杯を差し出して）もう一杯頂けませぬか。

旅人　此れは失礼。丁度良いところに代わりが参りました。

茨木が、酒の代わりを持って登場。無表情で、ぶっきらぼうな若者である。酒の壷をどんと置くと、舞台隅に行って蹲（うずくま）る。

九平太　申し訳御座いません。（茨木に向って）気をつけろい、無愛想な野郎だ。家はな、客商売なんだぞ。最近の若いもんは此れだから困る。

旅人　さあ、どうぞ。

行基　忝（かたじけな）い。

旅人　しかし、人足の音頭を取られるとは益々珍しい。

行基　寺に篭って経を読むだけが仏の道では御座らぬでな。巷に民の困窮があれば此れを助けるのもまた衆生済度（しゅじょうさいど）であります。建ち並ぶ寺院の甍は光輝いていても、其の下で暮らす民草は餓え苦しんでおります。誕生間もないこの国が列強に伍して往かねばならぬ経営の難しさは拙僧にも分かりますが、民草の苦しみは骨身に沁みます。しかし、この様な事を申すとお上から睨まれまし

てな・・。

旅人　（独白）するとこの男、噂の山沢亡命の類(たぐい)か・・・。

行基　だが、何れこの都は滅びますぞ。

旅人　これはまた異な事を申される。この都は、我国が唐をはじめとする列強に伍して行ける独立国家である事を示す為に、唐の都を模して築いたもの。何故そのような事を申される。

行基　糞で御座るよ、糞。この都には既に二十万人もの人が住んでいる。その上残された造営工事の為に、地方から人足を掻き集めているほか、多くの流民達が毎日流れ込んできている。人は、ものを食えば糞を垂れる生き物だ。帝も糞をひれば、女官も糞をひる。役人も、搾取される人民も糞を垂れる。この営みは止めようも無い。だが、問題はその行き場だ。御覧なさい、あの沼を。日毎に水嵩が増して大きくなっている。気付きませぬかこの臭いを。これはね、二十万人の垂れた糞が、この都の吐き出す諸々の汚物と一緒になってこの沼に流れ込むからだ。今は、陽に輝いて美しく見えるが、その内、巨大な糞溜となって溢れ出す。大洪水だ。この都は、自分達の吐き出した汚物に埋もれて滅びるのだ。

憶良　定かには信じ難い話だ。この沼が溢れるとは・・・・。

九平太　皆さん信じちゃいけませんぜ。この坊主の悪い癖で、見も知らぬ人に大風呂敷を広げたがる・・。（行基に）あんたもあんただ、坊主のくせに、無用心でいけねえ。酒を奢(おご)られたからって、見知らぬ奴に滅多な事を話すもんじゃね

え。それでなくったって、百姓を煽動するな、寺に篭って念仏だけ唱えてろって、あんた名指しの詔（みことのり）が出てるんじゃねえか。

行基　困ったものだ。民が自ら艱難（かんなん）を突破しようとすると、必ずや上（かみ）はこれを阻止しようとする。支配しようとする者と支配される者の間でいざこざが起こるのは歴史の必然でしょうかな。

九平太　何を能天気（のうてんき）な事を言ってやがる。（旅人と憶良に）あんた達も、こんな乞食坊主には構わず呑んで下さい。

蹲っていた茨木が、すっくと立ち上がり、懐に手を入れて身構える。

家麻呂が、駆け込んできて、勢い余って通り過ぎ、慌てて戻ると、舞台中央で尻餅を搗く。行基が奥へ逃げようとし、旅人、憶良は驚いて家麻呂を見詰める。

家麻呂　こ、こ、こ・・・。く、く、く・・・・。

九平太　嗚呼（ああ）、びっくりした。どうしたんだ。

家麻呂　み、水を呉れ。

九平太　とぼけた野郎だぜ、突然飛び込んで来やがって水を呉れだと。

家麻呂　み、水。

九平太　分かったよ。（茨木に）おい、水を汲んでやれ。

茨木は、舞台隅の甕から水を汲んでやり、家麻呂が旨そうに飲み干す。

九平太　さあ、落ち着いて訳を話せ。

家麻呂　こ、こ、此処に九平太という方が居ますか。

九平太　居るこたぁ居るが、九平太に何の用だ。

家麻呂　居るんですね。何処に・・・。

九平太　だから何の用だと言うんだ。

家麻呂　もしや貴方が九平太・・・。

九平太　そうだ。

家麻呂　（いきなり掴みかかる）さあ、掴まえた、もう逃がさないぞ。

九平太　何をしやがる・・・。

家麻呂　俺の財産が懸かっているんだ、逃がしゃしねえぞ。

九平太　この野郎、とんでもない野郎だ。放しやがれ。（ぶん殴る）

家麻呂　痛い。（額を抑えて倒れ込む）痛いじゃありませんか、乱暴な。怪我をしたらどうするんですか。

九平太　何を言いやがる。乱暴なのはどっちだ。いきなり人の首っ玉にむしゃぶり付きやがって。気でも違ったか。

家麻呂　伊吹の弥三郎って言う男を知っているでしょう。

九平太　伊吹の弥三郎だぁ・・・。

家麻呂　（身振りで）こんな大男で・・・、熊と素舞を取る・・・、口が耳まで裂けて、まるで鬼みたいに恐ろしい・・・。

九平太　伊吹の弥三郎って名前は知っているが、そいつが如何（どう）した。

家麻呂　首があったんです、山ん中に。

九平太　生首か。

家麻呂　いいえ、首が口を利いたんです。

九平太　死んでたんじゃねえのか・・。

家麻呂　埋まってたんです、首だけ出して。

九平太　ええぃ、まどろっこしい。さっさと話の本筋を言え。

家麻呂　はい、その首が掘り出して呉れと言うので、掘り出してやると、鬼のような大男が現れて、九平太と言う男に伝言をして来い。伝言をして返事を貰って来るまで、此れは預かって置くて言って、私が十六の時から三十年かかってやっと貯めた全財産を取り上げちまったんです。

君足が山の井と奥より登場。そっと出ようとするが、店の騒ぎで出るに出られなくなる。

九平太　分かったよ。奴が、お前の荷物を質に俺への伝言を頼んだと言うのだな。

家麻呂　はい、早く言えば。

九平太　早くも、遅くも有るか。それで、何だと言うんだその伝言は。

家麻呂　はい、その大男が言うには、「伊吹童子が都に行く」と伝えろと。

九平太　（茨木と目配せして）「伊吹童子が都に来る」だと・・・。

家麻呂　いえ、「都に行く」です。

九平太　うるせえ。どっちだって同じじゃねえか。確かに、そう言ったんだな。

家麻呂　はい、確かに。

九平太　そうかい。・・・・だが何の事だかわからねえ。

家麻呂　そんな。返事を貰わなけりゃ私の荷物が・・・。

九平太　気の毒だが、俺にゃ係わりのねえ事だ。

家麻呂　弥三郎を知ってるって言ったじゃないか。

九平太　弥三郎って名は聞いた事がある。だが、それだけの事よ、なんで奴が俺にそんな言伝(ことづて)をしたのか皆目(かいもく)わからねえ。

家麻呂　私の荷物は・・・荷物がなけりゃ故郷に帰れない・・。（泣き出す）

九平太　（茨木に）おい、酒を汲んで来てやりな。濁りで良いぞ、濁りで。

茨木が、濁り酒を持って来て、九平太に渡す。

九平太　さあ、気付けに一杯やりな。

家麻呂　酒なんて呑みたくない。返事を下さい。

九平太　いいから一杯やりなって。一杯やって気を落ち着けなって。（注いでやる）

家麻呂　知らないなんて言わずに、返事を下さい。

九平太　この野郎、くだくだ言うな。人が親切に呑めってぇんだから、黙って呑みやがれ。

家麻呂　（首を竦めて）はい。（独白）どいつもこいつも、乱暴ったらありゃしない。

九平太　呑め。

家麻呂　はい。（呑む）

九平太　呑めるじゃねえか。良い呑みっぷりだ。さあ、もう一杯。

家麻呂　いえ、そんなには呑めません。

九平太　良いから呑め。

家麻呂　そうですか。でも、酔っ払っちまいますよ。（呑む）

九平太　お前さんには、お前さんの事情があるだろうが、知らねえものは知らねえんだ。だが、なんとか力になれる事があるかも知れねえ。呑みながらもう少し詳しい話を聞かせてくれ。

家麻呂　（少し酩酊（めいてい）して来て）そうですか・・・。そうですね・・・。

九平太、家麻呂は額を寄せて話し込む。茨木は、体の力を抜いて二人の傍（かたわ）らに蹲る。

憶良　しかし、驚きました。つむじ風が舞い込んだようで・・・。

旅人　伊吹の弥三郎とか申したな。伊吹の弥三郎と言えば・・・・。

行基　あの伊吹童子の一の子分・・。

旅人　左様、伊吹のお山に巣食う鬼だ。

憶良　鬼退治と言えば、（君足に目をやり）密告と並んであの男の得意とするところ。

旅人　（酩酊して、目を据わらせながら）此処は一つからかってやろうか・・。

山の井　（君足に）さあ、今の内に・・。

君足　左様だな、ああ、いかい造作になった・・。

山の井　（笑いながら）何を言ってるんですよ、鯱鉾（しゃちょこ）ばっちゃって。（手を握って）また来てね。

旅人が、君足の周りを廻って、笠の内を覗こうとする。

君足　いや、確かに承った。

山の井　（旅人に）厭らしいね、人の顔を覗くもんじゃありませんよ。

旅人　どこぞでお見受けしたお顔のようだで・・・。

君足　人違いで御座ろう。

旅人　いやいや、さに有らず。そのお声にも聞き覚えがある。おゝ、やっぱり・・・。

君足　これは、これは中納言様。

旅人　お忍びでお楽しみかな。

君足　いやいや・・・。

旅人　世の中にあぶれ役人が溢れる中、えらいご出世で、羨ましく思う者が多いと聞く。今でも、右大臣藤原様のお屋敷には足繁（あししげ）くお通いかな。

君足　懇意にして戴いております。中納言様と同じで、身分の高い方にもかかわらず気さくにお声を掛けて頂いております。このところ、中納言様のお名もよく耳に致します。

旅人　どのような事で・・・。

君足　いえ、何かにつけお褒めになっておりますよ、中納言様は、目端（めはし）の利くお方

だと。まさか今更、謀反人長屋王の残党に味方されることもあるまい。藤原の娘を、ご一族の嫁に迎えられた。これぞ、戦場で逸早く勝機を見極める武人の才覚だと。流石に、武勇の誉れ高い大伴の一族よと申されてな。

旅人　（独白）此れは気をつけねばならぬぞ。中々上手だ。褒めながら脅しおる。

君足　貴方様こそどうして此処に・・。それに、そのようなお身形（みなり）で・・、見違えてしまいましたぞ。

旅人　あっ、これは座興、座興でしてな。人の世の憂さを棄てに参っておるのだ。

君足　それで、この土蜘蛛の巣に降りて来られた・・。

旅人　貴方も、人の世の遊びに飽きられた・・。

君足　左様。口説く歌の出来がどうの、仕来（しきた）りがどうのと手続きばかり煩い事を言って、いざ、寝間に入れば味気ない女が多くなりました。

旅人　土蜘蛛の女は如何ですかな・・。

君足　最高。いや、聞きしに勝ります。男を飽きさせませぬ。

旅人　それは結構。ところで、此処は恥を棄て、憂さを忘れる処。お互い此処での事は、人の世に持ち帰らぬと言う事で如何かな。

君足　畏まりました。此処での事はこの場限り、人の世には持ち帰りません。

旅人　そうと話が決れば、一献参りましょう。

君足　宜しいのですか・・どなたかとご一緒では・・。

旅人　山上憶良ですよ、歌をよくしましてな、心安い男ですから、気に掛けられるな。

君足　それでは・・。

旅人　おい、女。酒だ、酒だ。

山の井　はいはい、畏まりました。

山の井は、奥へ行き、酒を持って戻って来る。

家麻呂　（突然大声で）やい、返事を寄越しやがれ。寄越さねえと俺にも覚悟があるぞ・・。酒だ、酒をくれ・・。

九平太　しょうがねえな、酔っ払っちまいやがった。

家麻呂　（泣き声で）ねえ、お願いですよ、あの荷物がなけりゃ故郷に帰れないんだ。あれは私の全財産なんです。三十年間、こつこつ遊びもせずに貯めたもんなんですよ。あれが無きゃ、故郷に帰って女房になんと言えば良いんだ。女房は、まだ私が都のお屋敷で勤めているもんだと思っているんだ。

九平太　しくじって、首になったか。

家麻呂　とんでもない、しくじったりしませんよ。長屋王様のお屋敷で十六の時から働いてるんだ。奥方様の気鬱（きうつ）の治し方から下女の父親（てて）無し子の親が誰か、庭先の塵一つだって知らないものは無いんだ。でもね、ご主人様が謀反の罪を着せられて自殺してしまった。昨日まで、権勢並ぶ者のない威勢を張った旦那様が。それが、ある日突然チョン、家来の俺等もチョン。昨日まで良かったものが今日からは悪いって訳だ。畜生、どうしてなんだ。（頭を抱える）

九平太　分かった、分かった。少し悪酔いしてるぞ。どうだ、暫く横になったら。

家麻呂　うるさい、分かるもんか・・俺の気持ちが。・・三十年間だぞ、三十年。六日に一日の決まりの休みも取らず、朝から晩まで、おまけに月の内半分は深夜まで働いたんだ。三十年だぞ。妻子は故郷に置いてだ。偶(たま)の休みには故郷に帰ったが、女子供では出来ぬ畑の力仕事をこなしたんだ。そうやって三十年だぞ。それが、突然ポイだ。女房になんて言えば良いんだ。おまけに、やっとこ貯めた全財産が入った荷物を弥三郎と言う鬼に奪われちまった・・。あんたさえ返事を呉れれば、返して貰えるのだ。

酔った君足が、ふらふらと近付いて来る。

君足　おい、今、お、鬼と言わなんだか。

家麻呂　誰だ・・。

君足　鬼とよ、鬼と言わなんだかと申しておる。

家麻呂　言ったがどうした。

君足　その鬼は何処に居る。

家麻呂　山ん中よ。今頃は伊吹の棲家(すみか)に帰っているわ。

君足　伊吹と言えば、伊吹童子・・。

家麻呂　おや、知ってるじゃねえか。

九平太　（家麻呂に）おい、相手が悪い。口に気をつけた方がいいぞ。

家麻呂　余計なお世話だ。伊吹童子が都に来るんだ。べらぼうめ。

九平太　（君足に）こいつは出来上がっちまって居ますんで、どうぞお手柔らかに。

君足　分かっておる。心配いたすな。

家麻呂　何をごちゃごちゃ言ってるんだ。弥三郎だぞ、伊吹の弥三郎。こんなに大きくて、毛むくじゃらだ。真っ暗な山ん中で、そいつが俺に向って来たんだ、娘っ子を攫（さら）って生き血を吸うって言う真っ赤な口を開けて・・。俺だって負けちゃいないぞ・・・。（がっくりと首を垂れて寝てしまう）

九平太　おや、寝ちまいやがった。（君足に）ご無礼を申しまして、申し訳ありません。勘弁してやっておくんなさい。

君足　この者は、伊吹童子が都に参ると申していたのか。

九平太　へえ、左様で。

君足　此れは面白い。都に出て参れば、身共（みども）が退治してくれるわ。

九平太　これはまた、勇ましい。

憶良　この方は、鬼退治ではちと名の知れた方でな。

九平太　左様で御座いますか。

君足　都に出て参らずば、伊吹山に踏み込んでも良い。恐らく金銀財宝を貯めこんでいる事だろう。

旅人　しかし、手下も多かろう。

君足　鬼共が如何に多勢であろうとも恐るにたりません。いざとなれば、こちらには新しく設けられた六衛府の兵が控えております。金銀財宝が手に入るとな

れば、彼の者達も勇み立ちましょう。

行基　鬼退治は儲かりますか・・。

君足　命懸けだからな、それなりの見返りがなければ・・。何方ですかな、その不躾な申されようは・・。

行基　これは失礼致しました。法相宗薬師寺にて出家し、道照を師と仰いで修行いたしました行基と申します。師亡き後は、都造営の為に集められた役夫や諸国と都を往来する運脚夫の困窮を救う為に布施屋をやっております。また、百姓達の暮らしを助ける為、道を造り橋を懸けたり致しております。

君足　道理で日に焼けた坊主だと思ったが、あの悪名高い行基とはそこもとの事か。

行基　悪名高いとは恐れ入る。ただ、権力に阿って仏法を左右する売僧とは異なると言うだけで御座います。しかし、一匹狼として理想を掲げましても、理想を実現させるには金が掛かります。鬼退治で金銀財宝が手に入れば、その内の幾許かを合力願えませんでしょうかな。

君足　可笑しな事を言うと思ったら、それが狙いか。面白い坊主だ。

行基　そうされれば、これまで誅殺されて来た鬼共の供養にもなり、はたまた、ご自身の後生の功徳とも為りましょう。

君足　坊主だけに口が上手い。だが、面白い。考えておくぞ。

行基　有り難し。御仏の御心は広大無辺ですな。

旅人　（憶良に）あの男、鬼や土蜘蛛から収奪した砂金や玉鋼を元手に、四方八方に賂してさらなる出世を企てているのだ。

憶良　鬼退治もあの男にとっては事業の一つですか・・・。羨ましい、我等にもその様な才覚があったればと思います。

旅人　あの坊主も抜け目無い。すかさず金の匂いを嗅ぎつけおった。

憶良　皆、逞しい。それに、我が身を較ぶれば・・・・出るのは溜息ばかりです。

旅人　いやはや、酒が醒めた。さあ、呑みなおそう。

憶良　まだお呑みになりますか・・。

旅人　酒なくて何の己が浮世かなじゃ。鬼退治の名人も和尚殿も一緒に呑みなおしじゃ。

皆は車座になって、騒々しく呑みはじめる。

九平太　（茨木に）あいつが、噂の従五位下、成り上がり者の中臣君足だ。よく顔を覚えておくが良い。あの男が、お前の両親を殺した張本人だぜ。

茨木は、懐に手を入れて、じっと君足を睨む。

九平太　（大きな放屁をして）おお、すっきりした。屁を堪えるのもしんどいぜ。

暗転。

第一幕　二場

都の外れ、沼の辺の酒肆。夜。闇の中で、葦簀（よしず）の陰でひっそりと行水する山の井の仄かに白い裸身が見える。

忍び足で、伊吹童子が登場。山の井の行水姿に気付いて、ぎょっとして立ち止まる。最初は好奇心から盗み見ようとするが、覗くうち、山の井の姿に輝く母性を見出して、亡き母の俤（おもかげ）に重複させて感動する。

伊吹童子　（呟く）おゝ、天女のようだ。かか様の匂いがする・・・。（伏し拝む）

山の井　だれ、誰か居るのかい。覗いて悪さをしようなんて魂胆（こんたん）を起こすと、ただ置かないよ。（桶で行水の水を掛ける）

伊吹童子は、涼しい顔で、濡れた袖を拭い、静かに立ち去る。

九平太が登場。

九平太　どうした。

山の井　誰かが覗いたのさ。水を掛けてやったら、逃げちまった。

九平太　頓馬（とんま）な野郎だ。お前の裸を見て目が潰れたに違げえねえ。

山の井　そりゃ、どうゆう意味だえ。

九平太　このところ馬鹿に肌に脂がのって、後光が射してるみたいだぜ。

山の井　冗談ばっかし・・。

九平太　だが、気をつけたが良い。どうも最近、我等が事を嗅ぎ回っている奴がいるようだ。

山の井　それじゃあ、さっきの頓馬がそうだって言うのかい。

九平太　そうは言はねえが、大事の前だ。用心するにこした事は無い。

山の井が、薄物を纏(まと)って葦簀の陰から現れる。

山の井　伊吹童子は来るのかね。

九平太　弥三郎が来ると言えば、必ず来る。

山の井　どんな男なんだい。

九平太　そう言や、お前は会った事がなかったな。

山の井　皆が噂しているような男かい。

九平太　会やあ分かるさ。

山の井　本当に来るのかい。

九平太　ああ、来る。それにしても、弥三郎が見ず知らずの野郎に言伝するってのは腑(ふ)に落ちねえ。他に余程の大事があったのか・・。

山の井　楽しみだね、何だかどきどきしちまうよ。

九平太　惚れちゃあならねえぜ。

山の井　そんなに良い男かい。

九平太　さぁな。そうだ、惚れると言やぁ、あの中臣君足ってえ野郎、お前に惚れて

るようだ。しっかり咥え込んで骨抜きにしてくれ。

山の井　お安い御用だが、何か魂胆があるのかい。

九平太　お前は、知らなくていい事だ。

山の井　水臭いね、教えてくれたって良いだろう。

九平太　その内にな。

山の井　ちぇッ。

茨木が、ぬっと登場する。夜盗の扮装をしている。

九平太　おう、こっちに来い。それにしても、酷い蚊だ。夏も終わりだっていうのに何時までも暑さが続くんで、こんなに湧いて来やがるのか。（茨木に）其処へしゃがめ。（自分もしゃがむ）今夜の段取りだが、今夜は、自殺した左大臣の屋敷と御所に挟まれた、大きな松ノ木のある屋敷に忍び込め。どうも臭い。俺の勘じゃ、贋金造りの巣窟に違いねえと睨んでいるんだ。詔まで出して、あれだけ大掛かりに探索しても捕まらないところをみると、こりゃあ、大物が絡んでいるに違いねえ、それも、てえした大物が。だから、俺は案外お膝元じゃあねえか、御所の近場じゃねえかと睨んだのよ。だが、何にもするんじゃねえぞ。大物が絡んでいるとなりゃ、一つ間違や大事になる。いいな、確かめるだけだ。確かめたら、直ぐに帰って来い。余計な事をするんじゃねえ。分かったな、分かったら行け。遅くとも夜明けの太鼓までには戻れ。

茨木は、頷いて退場する。

山の井　あの若いの、口が利けないのかい。

九平太　いや、無口なだけだ。

山の井　そうかい。無口にしちゃあ、ど外れた無口だ。てっきり口が利けないのかと思った。

九平太　それには、訳があってな。あいつは、まだ幼い時に、目の前で両親が嬲(なぶ)り殺しにされたんだ。それ以来、滅多(めった)に口を利かなくなっちまいやがった。奴が口を利くのは、仕事の時だけだ。

山の井　へえーっ、そんな訳があったのかい。今出来のぶんむくれた若い衆とばかり思っていたが。

九平太　人は見かけに寄らないもんだ。それぞれ、何かを背負ってやがる。

山の井　本当だ。

九平太　そう言うお前だって、此処に落ちて来るにゃあ、それだけの訳があったんじゃねえか。

山の井　（笑う）そいつは、言いっこ無し。それを言えばあんただってそうだろう。

九平太　違げえねえ。これは俺が悪かった。

大欠伸(あくび)をしながら行基が登場する。

行基　暑さと蚊の大群に攻められて寝てもいられぬ。ところで、この夜更けに二人してひそひそと色の恋のと言う話しか。

山の井　よしておくれよ、今更そんな気になる仲じゃないのさ。

行基　さてさて、ならば何だ。おおそうか、さては悪事の相談だな。

九平太　変な勘ぐりはおきやがれ。

行基　いやいやさに非ず、悪事と言っても種類がある。困窮する民百姓から強権をもって搾り取り、私腹を肥やすのも悪事なら、私腹を肥やす貴族共から奪い返すも悪事。屁垂れの九平太、酒屋の主は世を忍ぶ仮の姿、その本性は義をもって盗みを為す夜盗と見た。違うかな、屁垂れ殿。

九平太　嫌な坊主だ。見当違いも程ほどにしやがれ、明後日（あさって）の方を向いてるぜ。

行基　お隠しあるな。拙僧は、何もお恐れながらと訴え様等という気は毛頭御座らぬ。むしろ、場合によっては仲間に加えて貰いたいと思っておりもうす。なにせ民草を救う仕事は銭がかかる。有っても有っても足りると言う事が無い。

そっと憶良が忍び出て来て、聞き耳をたてる。

行基　（次第に真剣になって）都では、御所をはじめ寺社仏閣造営の為に、地方より集められた人足どもが駄賃も貰えず、飢えて路傍（ろぼう）に倒れ、地方は地方で、凶作が続き荒廃している。国を治むべき者に志高き者少なく、私腹を肥やすに汲々（きゅうきゅう）とする輩か、唐の外圧の前に為す術もなくおろおろする者ばかりで、

民百姓の困窮に目を向ける者など居らぬ有様だ。まして、土蜘蛛だ、鬼だと蔑(さげす)まれて、別所に押し込められたまつろわぬ（不服従）人々の悲惨さは言葉に表せぬ程だ。お主等も土蜘蛛に落とされた者の裔(すえ)であろう。隠すな。俺も土蜘蛛だ、まつろわぬ者の子だ。力を貸してくれ。

九平太　何が狙いだ。

行基　銭よ。これからの時代は銭だ。銭が支配するようになる。贋金造りがこれだけ横行するのもその表れよ。

九平太　そこに目をつけたか。

行基　そこ・・。

九平太　そうだ、贋金造りだ。

行基　造ろうと言うのか。贋金造りは、打ち首獄門。親兄弟も財産没収で遠島だとの話だぞ。

九平太　それがどうした。そんな事が怖くちゃ銭は手にはいらねえぜ。だが、贋金を造ろうってんじゃねえ、盗むのよ。造るには元手も掛かるし人手も要る、近所の目も気にしなけりゃならねえ。危険が多すぎるわな。それよか、出来た奴をごっそり頂戴しちまおうって寸法だ。それにな、盗まれたのが贋金とあっちゃ、お恐れながらと訴えて出る訳にもいくめえ。

行基　成る程。やはり、玄人は玄人なりの考えがあるものだな。

九平太　よしやがれ、変な感心の仕方をするない。

行基　それで、目星はつけたのか。

九平太　大方な。

行基　分かった。仲間に入れてくれ。何としても人助けの銭が欲しい。目的は手段を浄化すると申してな、唐天仁（からてんじゅく）の偉い法典にも書いてある。

九平太　嘘つきやがれ・・（山の井に）だが、どうする・・。

山の井　良いじゃないのさ。土蜘蛛の出だって言うし、坊様にしては力がありそうじゃないか。いざって言う時にゃ役に立つかも知れない。ねえ、そうだろう、お坊様。

行基　真（まこと）に真に、この女性（にょしょう）は分かって御座る。

憶良が、姿を現す。

憶良　おい、その話、儂にも一口乗せぬか。

九平太　こいつは魂消（たまげ）た。立ち聞きしやがったか。

憶良　いや、悪いとは思ったが、つい出そびれて立ち聞きするような形になってしまった。そもそも昨日は呑み過ぎて、寝込んでしまったら、中納言様には置いていかれてしまった。どうやらしくじったようだ。いやいや、そんな事はよい、立ち聞きの話じゃ。喉が渇いたので目覚めたら何やら話し声が聞えるではないか。声につられてふらふらと、聞くでもなく聞いてしまった。

九平太　手前ぇは役人だろうが。話を聞かれた上は、生かしちゃおけねえ。

憶良　そう物騒な事を申すな。役人と謂えど、人の子じゃ。まして儂程の歳になれ

ば万事に堅い事は言わぬ、融通無碍じゃ。世の中の苦労に揉まれて、余程に肩の力も抜けて居るわ。

九平太　だからどうだと言うのだ。役人は死ぬまで役人根性が抜けねえもんだ。

憶良　だから、儂にも一口乗せろと申しておる。旨い話を見逃さないのも役人根性。儂とて偶には旨い話に出くわしても罰は当たらぬだろう。何せ出世が遅れておる。ここ一番と言うところで決め手に欠くのじゃ。家柄も無い、牽いてくれる上役も無ければ、力に為ってくれる親類縁者も無い。無論、金も無ければ、夜昼寝ずに働く若さも無いの無いない尽くしじゃ。そこにもってきて、若い娘と懇ろになったら子が出来た。子の将来を考えると早い内から学問をさせたいと女が言う。学問をさせるには先立つものが要る。何としても職に就いてくれと泣かれてな。昨日の中納言様が最後の頼みの綱であった。唐に行ったことも無いのに唐通ぶって、酒を呑ませて唐の話をさせておけばご機嫌という変わった男だが、上役は上役。珍しい所へご案内とこの家に連れ出して、唐の乞食坊主の、（行基に）これは失礼、流行り歌を下敷きに戯れ歌を作って聞かせて、胡麻を擂ったつもりが、不覚にもこっちが先に酔い潰れてしまい、しくじってしまった。こうなれば残る手は銭しかない。銭で職を買うのだ。何卒、儂も仲間に加えてくりゃれ。

九平太　冗談じゃねえ。（山の井に）また、変なのが一人出てきやがった。

山の井　世も末だね、役人が盗人の金で役目を買おうなんざ。そんなにまでして成りたいもんなのかね、国司って言うお役目は。

憶良　それのみを夢見て何十年、この歳になるまで頑張って来たんだ。ここで成れなきゃ死んでも死にきれぬ。

山の井　そんなもんかねえ。（九平太に）良いじゃないのさ、一人も二人も変わりゃしないさ。それに馬鹿と鋏（はさみ）は使い様て言うじゃないか、役人だってなんかの使い道があるかも知れないよ。それにさ、どっか惚（とぼ）けた面白いおじいちゃんじゃないかね。

憶良　惚けたおじいちゃんは恐れ入る。

九平太　ちぇ、仕方ねえな、お前がそう言うんなら良しとするか。

行基　そうと決れば、早速に・・・。

九平太　慌てるない。仲間になるからにゃあ、それだけの覚悟をしてもらう。いいか。

憶良、行基が頷く。

九平太　一つ、秘密は洩らすまじき事。一つ、裏切りは死をもって償うべき事。一つ、男女の仲を仕事に持ち込まぬ事。以上の約定を違えず、心を一にして事にあたる事。誓うか。

憶良　誓う。

行基　誓い申す。

九平太　良し。これからは仲間だ。だが、努々（ゆめゆめ）約定を違えるなよ。それに、もう一つ言っておく。いいか、人前では群れるな、仲間内では馴れ合うな。

憶良・行基　（声を揃えて）分かり申した。

憶良　人前では此れまで通りに致せば良いのだな。

九平太　そうだ。

行基　ところで、狙う先は何処だ。先程、目星はつけたと言っていたが・・。

九平太　茨木を物見に出してある。話は奴が帰ってからだ。それより、この仕事にはどうしても引き入れなければならない野郎がいる。

行基　我等だけでは未だ不足か。

九平太　勿論だ。お前等はひょんな拍子で飛び込んで来たに過ぎない。まだ、何の役に立つのかもわからねえじゃないか。

憶良　誰だそいつは。

九平太　伊吹の弥三郎に嚇かされて飛び込んで来た野郎よ。

憶良　あゝ、あの男・・。

行基　あの男が何の役に立つ。

九平太　聞き出したところによれば、あの男、近江の家麻呂と言って、謀反の罪で自殺した左大臣長屋王に三十年も仕えた子飼いだと言う。

行基　それがどうした。

九平太　お偉方の屋敷に詳しいと言う事よ。屋敷内の地理や日々の召使の動静など使用人にしか分からねえ動きってものがあるじゃねえか。

憶良　それじゃあ、左大臣の屋敷に忍ぼうと言うのか。

九平太　馬鹿言っちゃあいけねえ。あの家は潰れちまってるじゃねえか。近くに大き

な松の木のある屋敷があるだろうが・・。近所同士だし、家麻呂の野郎、あの屋敷の家司とも親しかったに違いねえ。屋敷の内も詳しいだろうよ。忍び込むには、その辺をしっかりと抑えておかねえとな。

憶良　松の木の屋敷と言えば、あの・・・・。

九平太　しーぃ。言っちゃあならんねえ。名前を言っちゃあならねえよ。

憶良　あそこが贋金造りの元凶だと言うのか・・。しかし、あまりに御所に近いし、あのお方がそのような事をされるとも思えぬ。

九平太　何があってもおかしく無い世の中だ。ま、俺の眼力には間違いねえと思うがな。茨木が戻りゃ分かる事だ。

行基　しかし、あの家麻呂と言う男、気が小さそうだし・・、仲間に加わるかどうか・・・。

九平太　そいつが、あんた等の最初の仕事だ。坊主と役人だ、人を丸め込むのはお手の物だろうて。

山の井　誰か来るよ。

九平太　茨木か・・。

山の井　いや違うね。笛の音が聞える・・・。

九平太　笛の音・・。

山の井　夜な夜な現れると噂の左大臣の怨霊じゃ無いだろうね。

九平太　嚇かす無い。

山の井　来た。

九平太　　よし、隠れろ。

九平太、憶良、行基、山の井は、店の中に隠れ、外を窺う。

薄肩衣（うすかたぎぬ）を被り、美しく女装した伊吹童子が横笛を吹きながら登場する。その後を武装した君足が、六衛府の衛士達を従えて尾行して来る。

伊吹童子　（謡う）先生（せんじょう）の事は、ことながければ申すまじ。いまこの生には、ある公卿の子とうまれ、叡山の稚児となり、ひとたび実相の室に入りしより、蛍雪のさとりを開き、一実円頓の春の花に詠じ、三諦即是の秋の月に吟ず。もとより容色嬋娟（ぜんえん）、世にすぐれ、三塔一の稚児学匠の名を得たり・・。

君足　　待てーぃ。

伊吹童子は、無視して行き過ぎようとする。

君足　　待て、待て、待てーイ。この夜更け、女一人の道行きとは面妖な。氏、姓名をお聞かせ願おう。

君足は、立ち塞がって、顔を見ようとする。伊吹童子は、肩衣を深く被って、顔を隠す。

君足　　（伊吹童子の周りを廻りながら）顔を隠すとは益々もって怪しい。（肩衣に手

を掛けようとする）人に仇なす物の怪の類であろう、顔を見せい。

伊吹童子　（女の声で）無礼をすると赦しませぬ。そちらこそ、女一人と侮（あなど）って無体を仕掛ける無法の者ではありませぬか。

君足　これはしたり、無法の者とは言いも言ったり。我こそは、都を護る右衛士府の頭、従五位下中臣君足なり。今般、夜な夜な都大路に怪奇の者出没して、見目良き女房を攫い、その生き血を吸うと聞く。恐らくは、世を拗（す）ねた鬼、土蜘蛛の類ならん。聖上の大御心を悩まし、良民を恐れさせる不埒（ふらち）の輩を退治してくれんとこうして見回って居るのだ。

伊吹童子　喧（やかま）しい、君足。よくも御託（ごたく）をならべやがったな。（肩衣を脱捨てる）

君足　おゝ、やはり男か。さすれば貴様は伊吹童子。

伊吹童子　いかにも伊吹童子だ。良民を恐れさせる不埒の輩とは笑わせるな。不埒な輩はどっちだ。我等が郷に砂金の出るを聞きつけ、伊吹の氏の上に難癖つけ、夫婦諸共惨殺して砂金を奪ったのは何処のどいつだ。不埒な輩とは、その金で官位を買い、中臣君足と名乗っている奴だ。

君足　黙れ、言わせて置けば埒も無い。土蜘蛛の本性を現したな。

伊吹童子　基よりこの国は我等がもの、後より侵し入って収奪したお前等に土蜘蛛呼ばわりされる謂れは無いわ。

君足　曳かれ者の小唄よ。この世は強い者が勝つ。力ある者が収奪して何が悪い。

伊吹童子　居直ったな、君足。殺された氏の上は、大恩ある我が育ての親。親の仇を討ち、土蜘蛛と卑しめられた我等の恨み思い知らせてくれる。

君足　　望むところだ。土蜘蛛の頭として討ち取ってくれるわ。者共懸かれ。

衛士達は伊吹童子に討ちかかり、乱闘になる。最初、伊吹童子が優勢に勝負を進めるが、追い詰められた君足は、懐に隠し持った目潰しの粉を投げ付ける。

伊吹童子　　（怯（ひる）んで）目潰しとは卑怯な！

君足　　しゃらくせい。命の遣り取りに卑怯も糞もあるか！

勢いを取り戻した衛士達が伊吹童子を取り囲むと、君足は、抜いた太刀で目の見えなくなった伊吹童子に斬りつける。手傷を負った伊吹童子は、沼に飛び込み、水音と共に姿を消す。

君足　　斬ったぞ、斬った・・。中臣君足が伊吹童子を討ち取ったぞ。

店の中から九平太、山の井、憶良、行基がぞろぞろと現れ、君足を見詰める。

幕。

第二幕　一場

都の外れ、酒肆の沼に面した裏手。隣接して葦に囲まれた粗末な差し掛け小屋が在る。気だるい晩夏の遅い午後。ぼんやりと沼を眺めている家麻呂。

店の裏手から九平太が生塵の桶を持って登場し、沼に投げ捨て、大きな放屁をして再び店に消える。

憶良が、胸をぽりぽり掻きながら登場し、家麻呂の傍にしゃがむ。

憶良　夜も昼もこう蚊に責められては叶わぬな。どうじゃ、宿酔（ふつかよ）いは直ったかな。

家麻呂　いえ、まだ頭ががんがんします。気持ち悪ぅ―い。

憶良　よしよし、水を汲んで来て進ぜよう。

憶良は、店の裏手に入り直ぐ水を持って戻って来る。

憶良　（水を渡しながら）飲めば気分も優れよう。

家麻呂　（飲みながら）忝（かたじけ）のう御座います。あゝ旨い・・。お陰で生き返りました。

憶良　それはなにより。それにしても昨夜はお互い深酒をしてしまったようだ・・。

家麻呂　すると、貴方様も・・。

憶良　そうよ、些（いささ）か過ごしすぎた。お陰でどうやら上役をしくじったようだ・・。

家麻呂　それはお気の毒。しかし、私も人様の事は言っていられません。伊吹の弥三郎に荷物を取り上げられたお陰で思わぬ深酒に為ってしまい、今日もこの有

様です。

憶良　伊吹童子がな、昨夜斬られた。

家麻呂　えーっ、斬られた・・。本当ですか。

憶良　本当だとも。しかも斬られたのは、この家の前だ。

家麻呂　この家の前・・。前後不覚で気付かなんだ。貴方は、ご覧になったのですか。

憶良　見た。

家麻呂　誰に斬られたのです。

憶良　中臣君足だ。憶えておらぬか、お主に伊吹童子の事を聞いた男だ。

家麻呂　はい、うっすらと・・。それで、どうなりました。死んだのですか・・。

憶良　いや、それが分からぬ。

家麻呂　と言うと・・。

憶良　沼に飛び込んで姿を消した。まだ、死体が揚がらぬところを見ると逃げたのかも知れぬ。

家麻呂　私の荷物はどうなるのでしょう・・。

憶良　荷物・・。

家麻呂　盗られた荷物ですよ。

憶良　おゝ、そうであったな。

家麻呂　あれが無ければ、故郷(くに)に帰れません。女房、子供に・・。

憶良　またそれか。

家麻呂　三十年間、お屋敷で働いてこつこつ貯めた全財産なんです。故郷(くに)では、ここ

数年の凶作に加え、今年は野鼠が異常発生して作物を食い荒らし、その日の糧(かて)にも事欠き、女房は、年老いた私の両親と子供達を抱えて途方に暮れています。

憶良　分かった、分かった。そう嘆くな。ところで、そのお屋敷だが・・。近所に、大きな松の木のある屋敷が無かったか・・。

家麻呂　松の木・・。あゝ、御座いましたとも。松の木の屋敷と言えば、ほれ、あの有名な・・・。

憶良　しーぃ、名前は申すな。

家麻呂　へぇ、でも、その屋敷がどうか致しましたか・・。

憶良　いや、なに・・・。近所とあれば、その家の家司を存じておるかと思ってな。

家麻呂　勿論で御座います。主同士は仲が良かった訳ではありませんが、家司と言うものは、これはまた別でしてな。大っぴらに行き来は出来ませんが、職業柄お互いに情報の交換は致しまして、それは長い付き合いで御座いますよ。

憶良　ほう、左様か、左様か。それでは、屋敷の様子も詳しいであろうな。

家麻呂　それはもう我が家のように存じておりますが・・。

憶良　結構、結構。ところでお主、荷物が戻らぬとあれば、日々の糧も侭(まま)成らぬであろうし、故郷(ふるさと)に帰る路銀にも困るのではないか。

家麻呂　それはもう、そのとおりで御座います。考えれば考えるほど途方に暮れてしまいます。

憶良　さもあろう、さもあろう。もし、ひと働きすれば、路銀も出来、故郷に錦を

飾る土産の銭も出来ると言う話があったら如何する。

家麻呂　そんな話が御座いますのか・・。

憶良　あるにはある。しかし、些か秘密を要する話でな。

家麻呂　はあ。

憶良　おや、人が来たようだ・・。此処ではなんだからあちらへ参ろう。

家麻呂　はい。

憶良と家麻呂は、語らいながら葦原の奥に消える。

家麻呂の妻が登場する。市女笠を持って、汗を掻き掻ききょろきょろと物珍しげに辺りを見回している。酒肆の裏を行き来し、中を覗き込んで声をかける。

妻　もうし、もうし・・。御免下さりませ。お頼み申しまする、何方かおいででは御座いませんか。

山の井が、店から登場。

山の井　はい、はい、誰だね、裏から声を掛けるのは。おや、これは珍しい、女子のお客様じゃないか。

妻　あのーぅ、道に迷いましてこのような処から声をかけますが、此方に家麻呂という者がお邪魔して居りませんでしょうか・・。

山の井　家麻呂・・。

妻　はい。私は家麻呂の家の者で、けして怪しい者では御座いません。実は在所より家麻呂を訪ねて上って参りまして、お屋敷を訪ねましたところ、貴女、驚くじゃありませんか・・。

山の井　どうされました。

妻　いえね、お屋敷が潰れてしまっておりますんですよ。びっくり致しました。それも、何ですか旦那様が謀反（むほん）を企てたとか言うんで御座いましょう、あの飛ぶ鳥も落す勢いの旦那様がですよ。本当に魂消てしまいました。家の人は何にも言って寄越さないのですもの。家の人と言えば、勿論お屋敷には居りません。ご近所を聞いて廻りましたところ、ある人が此方様で見掛けたようだと申されるじゃありませんか。そんな事でお尋ねにあがりました。

山の井　此処で見かけたと人が言ったのですか。

妻　はい。ご近所の方が・・・。

山の井　（独白）恐ろしい事。人の目は何処にあるか知れやしない。（妻に）ちょっと待って下さいね、この家の主に訊いてみますからね。

妻　お願い申します。（興味深そうに店の中を覗く）何だか胡散（うさん）臭そうな処だねぇ。あの女もだらしない格好しちゃって・・。（匂いを嗅いで）酒臭いね、おゝ嫌だ。こんな所で家の人は何やってるんだか・・。それにしても、あの女どっかで見たような気もするんだが・・。

店から、九平太と山の井が登場する。

九平太　人を訪ねて見えたってえのは、お前さんかい。

妻　はい、私で御座います。家の人で家麻呂と申す者を探しております。

九平太　家麻呂さんねえ・・。確かに、そんな名前の方はお見えになっていましたが、姿が見えぬところをみると、もうお帰りになったんじゃないかな。

妻　帰った・・。何処へで御座いましょう、お屋敷はもう無いし・・・。

九平太　確か故郷（くに）に帰るとか言っていたな。

妻　在所にで御座いますか。

九平太　（山の井に目配せしながら）いや、確かな事は分かりません。そのように言っていたと思うのだが・・。

山の井　その辺りに用足しに出られただけかも知れませんよ。この家の主には世話に為ったのだから、故郷（くに）に帰るのならば一言ぐらい挨拶が有ったっていいんだから。

九平太　そうかも知れぬな。此処は客商売で人の出入りが激しいもので、確かな事は分かりません。

妻　・・困りました。どうしても会って相談せねばならぬ用事がありまして、在所から昼夜通して急いで参ったものだから、もう一歩も足が前に出ぬほど疲れております。申し訳ありませんが、この辺りをお借りして暫し休ませて戴けませんでしょうか・・。家の人も戻るかもしれぬようですし。

九平太　（山の井に）どうする・・。

山の井　余程に疲れておられるご様子。可哀相じゃないか、休ませてあげなね。

九平太　そうするか・・。それじゃあ、そこに差し掛け小屋がある。粗末な所だがそんな所でも良けりゃ休んで行きなされ。

妻　有難う御座います。助かります。（独白）やれやれ、やっと手足が伸ばせる。それにしても何処へ行っちまったんだろう、私にこんな苦労をさせて・・。

家麻呂の妻は荷物を降ろし、差し掛け小屋に入り、脚を投げ出して眠り込む。

九平太　家麻呂の野郎は今何処に。

山の井　憶良と一緒に沼で話し込んでるよ。

九平太　上手く誘い込んだか・・。

山の井　さあ、どうだか。

九平太　茨木が未だ戻らねえのだ。しくじりやがったか・・。

山の井　それは心配だね。

九平太　確かめたら直ぐに戻れ、余計な事をするんじゃねえと言ったんだが・・。

山の井　贋金造りをしようてくらいの屋敷だ、見張りも厳しいだろうし・・。

九平太　一度屋敷の前を通ってみちゃくれないか。様子を探って欲しい。

山の井　あいよ。これから行ってみよう。

九平太　頼むぜ。

山の井　（身繕(みづくろ)いをしながら）伊吹童子は、どうしちゃったかね。逃げられたかしら・・。

九平太　刀傷はてえした事がなくとも、手傷を負って沼にへえったのだ。この季節だ、きっと化膿するぜ。

山の井　命に別状なければ良いんだけれど・・。

九平太　気になるかい。

山の井　そりゃーぁ・・。

九平太　君足の野郎、かなり舞い上がっていたが、あれからお繁(しげ)りかい。

山の井　（笑う）人を斬ったてんで気を昂(たか)ぶらせてね。しっかり毒気は抜いてやったさ。今朝も名残り惜しそうにしていたが、開門の二番太鼓が鳴る前に、朝廷に遅れるよって追い出してやった。

九平太　そうかい、そうかい。今頃は、きっと鬼退治だの、土蜘蛛を斬ったのと吹聴(ふいちょう)しているだろうて。

山の井　だろうね。そいじゃ、あたいは出掛けるからね。

九平太　おゝ、そうしてくれ。

山の井が、退場する。見送る九平太。入れ違いに葦原から憶良が登場する。

九平太　どうだ、上手く誘い込んだか。

憶良　今ひとつしゃっきりしないが、大分その気に為り始めてはいる。

九平太　頼りねえな。

憶良　心配召さるな、どちらに転んでも良いように大事の部分は話して御座らぬ。
それに、松の木屋敷の様子は聞き出しましたぞ。

九平太　どんな様子だ。

憶良　中々の難物ですな。屋敷内も表屋敷と裏の部分が在って、裏は家人と謂えど近付けないようです。あの男、屋敷の家司とは何でも話し合える仲だそうで、親しくして来たが、どうも裏の事については言いたがらなかったそうですよ。
恐れていた風があったそうで・・・。

九平太　恐れていた・・。益々もって怪しくなって来やがった。（揉（も）み手をする）ところで家麻呂は・・・。

憶良　まだ本調子じゃ無いようで、沼のほとりでぼんやりしています。

九平太　（妻の方を目で示しながら）家の者だと言う女子が訪ねて来ているんだ。

憶良　（覗き込んで）ほほう、あの女子ですか。

九平太　そうだ。どうしたものか・・・。

憶良　会わせぬ訳にも参らぬでしょう。

九平太　気の強そうな女子だから、家麻呂の気が変わらねば良いが・・・。

憶良　為るほど。尻に敷かれていそうだ。

二人は、腕組みをして、涎を垂らして寝穢（いぎたな）く眠る妻を見詰める。
大声で話しながら店の裏手から登場する旅人と君足。高笑いする君足。

君足　連れしょンですぞ、連れしょん。

旅人　この沼を溢れさせてくれるわ。

二人は、葦原から沼に向って放尿する。

君足　気持ち良―いぃー。気持ち良いばかりでなく、息子も元気だ。鬼退治はこちらにも効きますな。

旅人　それは羨ましい、儂など歳で、そちらの方はとんとご無沙汰だ。（憶良に）お主、未だ此処に居ったのか、良いご身分だな。

憶良　これは、きつい申され様で恐れ入ります。何分働き様の無い身でして・・。昨夜は、失礼致しました。折角、ご酒を頂戴致しましたのに、慣れない澄み酒につい呑み過ぎまして不覚を取りました。お赦し下さいませ。

旅人　まあ良い。聞いたか、この君足殿が伊吹童子を討ち取ったとよ。都中の噂になっておる。

君足　右大臣藤原様も大変お喜びになって、お褒めの言葉を頂戴致しましたぞ。

憶良　私は、この目で拝見致しました。

旅人　見たとな・・。

君足　中納言様、申しませんでしたかな、伊吹童子を討ち取ったはこの家の前で御座る。

九平太　（放屁をして）これはご無礼。（独白）それにしても長い小ン便だ。

君足　臭いな。（腰を振って滴を切る）この者達にも我が武勇を見せてやりました。

九平太　（独白）ちぇ、何が武勇だ。

君足　な、な、そうであろうが。

九平太　はい。左様で御座います。

君足　見慣れぬ薄肩衣などを被って、小癪にも横笛など吹きましてな、女子を装っておりました。この妖かしの者とばかり斬り付けますと確かな手ごたえ・・。

旅人　討ち取ったか・・。

君足　血飛沫（ちしぶき）を上げましたな。敵わぬと思ったか、薄肩衣を投げつけ正体を現しました・・。

旅人　ふむふむ。それで、それで・・。

君足　ここぞとばかり二の太刀、三の太刀を見舞いました。

旅人　今度は討ち取ったな。

君足　逃げまして御座います。

旅人　逃げた・・。

君足　沼に身を投げました。

旅人　逃がしたのか・・。

君足　逃げたとは言え討ち取ったも同然。あれだけの手傷、助かる訳が無い。

旅人　（憶良達に）お主達も見ていたのか。

憶良　はい。（旅人の耳に囁く）危うく踏み潰される処を、目潰しを使って・・・。

旅人　なんだ詰らない、騙（だ）まし討ちか。

君足　こう血飛沫があがって・・・。

旅人　もう良い。酒だ、酒だ。（店に戻って行く）結局、取逃がしたのでないか。

九平太　はいはい、只今お持ちします。（酒を持って後を追う）

憶良　（君足に）中納言様は、ああ見えても九州征伐では総大将を務められ、隼人どもに鬼と恐れられた方だ。その誅殺ぶりは物凄く、弱い敵は膾（なます）に斬ったり、捕らえて磔（はりつけ）にしたり、強い敵には姦計をめぐらせて騙まし討ちにして斬り従えた方だ。中途半端はお嫌いですぞ。

君足　気難しい爺さんだ。藤原様はお喜びになったのに・・・。

旅人　（店から）何時までぐだぐだ申しておる。こっちに参れ。（店から顔を出して）憶良も此方へ参らぬか。実はな、唐の文人達がやると聞く、梅花の下での歌の会をやってみたいと思いついてな。梅の花と言えば正月の物だで、未だ先の話だが、同好の志が梅の下に集い、宴を開いて歌を作る。どうだ、良いだろう。

憶良　左大臣様が披（ひら）かれた作宝楼（さほろう）の宴のような・・・。

旅人　そうだ、左大臣のは唐の詩を創る宴だったが、儂のは倭（やまと）言葉の歌だ。真似ではないぞ、倭言葉の歌の宴は初めての筈だ。

憶良　これはご名案。さすがで御座いますな。名立たる歌人を集められれば、後世にも名を残す宴と為りましょう。

旅人　そうであろう、我ながら良い思い付きだと思う。お主も呼んでやるぞ。

憶良　有り難き幸せに御座ります。そのような晴れがましい席に出ますにも名乗れ

る身分が欲しいものです。

旅人　またそれか。焦るでない、志あるところ自ずと道が拓けるものだ。

君足　（辺りを見回しながら）亭主、亭主。

九平太　（店から戻って）はい。お呼びですか。

君足　女はどうした。山の井は・・・。

九平太　用足しに出ております。

君足　何時帰る。

九平太　これはお安くありません。お気に召しましたか・・。

君足　えゝ、煩（うるさ）い。何時戻ると聞いて居るのだ。

九平太　直ぐで御座います。一寸其処まで使いに出ただけですから。

君足　つまらぬ。えゝぃ、酒だ、酒。

九平太　はいはい、分かりました。さあ、あちらへ、あちらへ、此処は裏で御座います、お客様にお見せする所では御座いません。（君足を店へ追い立てる）

旅人　（君足に囁きかける）あの女子、それ程よろしいか・・。

君足　（照れながら）いや、お恥ずかしいが、この歳になるまで知りませんでした。後を惹（ひ）きます。餅肌でしてな・・。

旅人　これは手放しで惚気（のろけ）られる。しかし、色事は下賤（げせん）の女に限るかも知れぬ。土蜘蛛の女は現身（うつせみ）に非ず、此の世のものであって此の世の女ではありませんからな。

君足　若い頃は相当に遊ばれましたか。

旅人　いやいや、儂は妻一筋でな。

憶良　仲の良いご夫婦ですよ。ただ、このところ奥様のお加減が優れませぬ。

旅人　これこれ、そのような事まで申すものではない。しかし、気を付けられよ。土蜘蛛の女はどのような魂胆を抱いているか分かり申さぬ。決して心許しては為りませんぞ。

君足　心得ており申す。

旅人と君足は、店に戻る。陽が傾き、夕闇が迫り、店に灯が点る。

差し掛け小屋の家麻呂の妻が目を覚ます。

妻　（独白）なんて五月蠅（うるさ）いのだろう、おちおち眠っても居られないじゃないか。都は騒々しい処だと聞いて来たが本当だ・・。（起き上がって来て）家の人は戻りませんでしょうか・・。

九平太　戻らねえな。

妻　そうですか。（しょんぼりして）もう一度お屋敷の辺りを探してみます。

九平太　そうかい。

妻　（荷物を背負って）お世話になりました。もし、家の人が此方様に戻るような事がありましたら、此処で待つように申して下さい。在所へ戻る前にもう一度寄らせて貰いますので・・。

九平太　承知だ。

妻　有難う御座いました。（とぼとぼと立ち去る）

憶良　哀れだな。

九平太　大事の前の小事だ。ところでお前さん、遣唐使の一員として唐に渡った事があるんだって。

憶良　遣唐小録と言ってな、最も下っ端だが・・・。

九平太　当時は未だ位が無かったそうじゃないか。無位にして選ばれるとは大したものだ。

憶良　四十にして無位というのも情け無いがな。それにしても、俺の昔に詳しいではないか。

九平太　興味がある。

憶良　何故。仲間になったからか・・・。

九平太　それもある。だが、以前から目をつけていた。そうでなければ、そう容易（たやす）く仲間に入れるものか。

憶良　聞かせてくれ、何故俺に目をつけた。

九平太　唐に渡ったのであれば、唐の大きさ、凄さが分かっているだろう。

憶良　それはもう・・・。

九平太　その力をもってすれば、お主を国司にする事など朝飯前だ。そうは思わぬか。

憶良　思う。・・出来るのか。

九平太　出来る。

憶良　お前は何者だ。ただの盗人では無さそうだな・・・。

九平太　俺は・・・。

山の井が駆け込んで来る。

山の井　大変だよ・・・。

九平太　どうした。

山の井　伊吹童子が見付かった。

九平太　伊吹童子・・・。しーぃ、店に君足が居る。

山の井　（頷いて声を顰（ひそ）め）今、茨木と坊主が連れて来る。斬られた傷は大した事はないが、酷い熱だ。

行基と茨木に担がれてぐったりした伊吹童子が登場。蓑を被せられている。

九平太　何処で見つけた。

行基　対岸の柳の樹の下だ。橋の普請を終えての帰り道に偶々（たまたま）見つけた。どうした訳か、茨木が介抱していた・・・。

九平太　道理であいつの帰りが遅い訳だ。（辺りを見回して）兎（と）に角（かく）その小屋に隠せ。

差し掛け小屋に運び入れ、藁を掛けて寝かせる。店の方からどっと笑い声があがり、ざわめきが聞えて来る。

九平太　表の奴等に気付かれちゃならねえ。（伊吹童子の額に触り）確かにこりゃあ大した熱だ。

行基　今は水で冷やせ。だが、間も無く悪寒（おかん）がして、震えが来る・・・。

九平太　詳しいな。

甲斐甲斐しく介抱する山の井。

行基　拙僧の師匠道照様は、唐に渡り、修行の末に山中で多くの虎に囲まれたが、念力をもって釈伏（しゃくふく）したと言う男だ。金創をはじめあらゆる怪我、病に効く直伝の加持祈祷（かじきとう）も心得ているのさ。

九平太　これは頼もしい。呪（まじな）いもやるのか・・・。

行基　勿論。さあ、湯を沸かしてくれ。それに酒だ。傷口を綺麗（きれい）にしなければならぬ。

九平太　分かった。（茨木に）おい、湯と酒だ。

茨木は、素直に、湯と酒を取りに店に向う。また、店のさんざめきが聞える。

憶良　（茨木を目で指して）やに素直だな。

行基　（山の井に）衣を脱がせて裸にしろ。

山の井　あい。（伊吹童子を裸にする）

湯と酒を提げ、手に小さな灯りを持って茨木が登場。湯と酒を受け取った行基は、灯りの下で伊吹童子の傷の手当てをする。手伝う山の井、茨木。覗き込む九平太と憶良。

行基　良し、傷口はこれで良いだろう。火を燃やせ。

九平太　いや、火は不味（まず）い。気付かれる。

行基　困ったな、暖めねばならぬ。ほれ、震えが来た・・。

伊吹童子が、悪寒で震え始める。歯の根もあわず、次第に飛び上がるような激しさで全身に震えが来る。沼から葦原を分けて戻って来た家麻呂が、辺りのただならぬ様子に息を呑んで見詰める。

行基　（山の井に）裸になってこの男に添い伏ししてやってくれぬか。人肌で温めるのだ。

山の井　あたしが・・・。

行基　頼む。この震えを静めるにはそれしかない。滝のように汗が出れば良し、出なければそれまでだ。

憶良　それほどまでして、この男を助けねばならぬか。

行基　人ひとりの命だ。

憶良　鬼ではないか・・。

行基　此の世に鬼など居ない。お前等が勝手にそう呼ぶだけだ。

山の井　やりましょ。

山の井は、するすると着物を脱いで、震える伊吹童子に優しく添い寝する。茨木が山の井の着物を二人に掛ける。

伊吹童子　（うめきながら）・・・かかさま・・・。

憶良　このような男でも、母の名を呼ぶとは・・・。

九平太　よし、野郎は山の井に任せた。（茨木に）ところでどうだ。

茨木　あの屋敷に間違いねえ。大仕掛けで盗んだ仏像等を鋳直（いなお）していやがった。

九平太　そうか、間違いなしだな。

茨木　出来た贋金は地下に室（むろ）を掘って隠してある。

九平太　分かった。ご苦労だった。見張りは・・・。

茨木　（憶良と行基に目を配り）いいのか、喋って・・・。

九平太　おゝ、仲間だ。

茨木　仲間・・・。素人（とうしろう）だぜ。

九平太　贋金と言えど銅で出来た銭だ。運ぶにゃ人手が要る。

茨木　（それでも疑わしそうに二人を見る）ふん。見張りは厳重だ。忍び込むのは素人には無理だ。

九平太　伊吹童子はあの体たらくで役に立ねえ。まず、俺とお前で忍び込む。修羅場は二人で潜り抜けるしかねえ。首尾よく盗んだらあいつ等の出番だ。

茨木　大丈夫か、闇夜に初めての他人の屋敷だ。どじを踏むに違いない。

九平太　そこで道案内が必要になる。（隠れている家麻呂に）隠れてねえで、出て来たらどうだい、家麻呂さん。

家麻呂　（恐る恐る近付いて来る）は、はい。

九平太　話はしっかり聞いていたな。

家麻呂　あのーう、そんなつもりはなかったんですが・・。

九平太　いいって事よ。半分はあんたに聞かせる積りで喋っていたんだ。

家麻呂　そ、そうですか・・。

九平太　大方は憶良からも聞いたと思うが、そう言う事だ。二人を奥まで案内してくんな。

家麻呂　私は、盗人なんぞ・・。

九平太　聞いたからには逃げられないぜ。あんたのかみさんがさっき訪ねて来た。

家麻呂　嫁かが・・。

九平太　在所じゃ、子供が餓えて痩せ細り、あんたの両親は口減らしの為に、毎日山に棄てて呉れろと泣くそうだ。

家麻呂　あゝーぁ・・。（頭を抱えて蹲る）

九平太　また来ると言っていた。銭がなけりゃ在所にゃ帰れないぜ。

家麻呂　わ、分かりました。

九平太　そう言う事だ、茨木。事が決れば早い方が良い、今夜だ。さて、何時までも店を抛（ほう）っておく訳にゃいかねえ。行くぜ。

店に戻って行く九平太、茨木。

憶良　若造の喋るのを初めて聞いた。

行基　俺もだ。

憶良　あの男、我等を疑っておる・・・。

行基　疑われても致し方あるまい。

憶良　確かに。誰が見ても二人とも怪しい。

行基と憶良は、顔を見合わせて笑う。

行基　怪しいついでに呪(まじな)いでもするか。（ぎょろりと眼を剥いて）呪いで此の世が変われば此れほど容易い事はないのだが・・・。

憶良　時と時節を呪(のろ)っても仕方ないか。（凄んで）腹の底に肝っ玉を据える事だ。

行基　ま、そう言う事だ。

憶良は店に戻って行く。店からは賑やかな笑い声と騒々しさが聞えて来る。

差し掛け小屋の二人に向って祈祷を始める行基。呆然と佇(たたず)む家麻呂。

暗転。

第二幕　二場

都の外れ、酒肆の沼に面した裏手。舞台は闇である。葦に囲まれた粗末な差し掛け小屋に、小さな灯りが点る。伊吹童子に添い伏ししている山の井。

山の井は、そっと身を起こして身繕いする。呻き声を挙げる伊吹童子。汗を拭いてやる山の井。拭き終わると立ち上がり、小屋を離れようとする。

伊吹童子　行かないでくれ。

山の井　おや、気が付いたかえ。

伊吹童子　行かないでくれ・・。

山の井　喉が渇いたろう、汗をかいたからね。水を汲んできてあげる。

伊吹童子　・・死ななかったのか。

山の井　もう、大丈夫だろう。熱も下がったし、傷も塞がった。

伊吹童子　私は斬られたのか・・。

山の井　そうだよ。沼に入ったんで、傷が腐ったんだ。

伊吹童子　あんたが助けてくれたのか・・。

山の井　茨木が見つけて、行基って坊様が傷口を塞いだのさ。

伊吹童子　裸の女が私を抱いていてくれたような気がする。あれは夢か・・。

山の井　そうだよ。

伊吹童子　いや違う。あんただ。あんたが私を抱いて温めてくれたのだ。

山の井　黙って。・・まだ、あまり喋らない方が良い。

伊吹童子　喋りたいんだ、助かったんだから・・・。それに私は別の意味で生き返ったような気がする・・。

山の井　難しい事言うね。どう言う事。

伊吹童子　それは・・・・恥ずかしくて言えぬ。

山の井　言って。

伊吹童子　・・・探していたかか様を見つけた。

山の井　かか様を・・・。

伊吹童子　私はかか様に棄てられたんだ。・・伊吹の山に・・・。

山の井　恨んでいるのかい。

伊吹童子　恨んでいたんだ。だが、今はもう恨んでいない。

山の井　どうして。

伊吹童子　言ったろう。見つけたんだ、新しいかか様を。これまで出会った何百人もの女達の中に、私を棄てないかか様を探していたんだと思う。それを、見つけたんだよ・・・。あんたの名が知りたい。

山の井　あたしの・・・。

伊吹童子　そう。

山の井　山の井。

伊吹童子　山の井・・・良い名だ。

山の井　でも、ほんとの名じゃない。

伊吹童子　何て言うんだ、ほんとの名は・・・。

山の井　ほんとの名は・・・・忘れちゃった。

伊吹童子　忘れた・・・。あんたもきっと誰かを恨んでいるんだ・・。

山の井　・・・・・・。

伊吹童子　誰を恨んでいるんだい。

山の井　・・自分でも分からないのさ・・誰を恨んでいいのか・・。

伊吹童子　聞かせてくれ。あんたの事が知りたい。

山の井　・・あたしのかか様は・・貧しい家の娘だったが、身分高い家の息子に見初められ、あたしを産んだのさ。

伊吹童子　あんたも、かか様を・・・。

山の井　いいえ。・・・かか様がどんな気持ちで暮らしたのか、あたしは知らない。・・物心つく前に死んでしまったからね。だから、あたしには笑った顔のかか様の記憶が無いの。

伊吹童子　・・・・・・。

山の井　あたしを育ててくれたのは、爺様だった。・・・ある日、旅の途中の日嗣（ひつぎ）の皇子（みこ）が、家に立ち寄り、どうした気紛れかあたしを所望したの。今思えば・・爺様に日嗣の皇子の申し出を拒（こば）める筈も無いと分かるけど・・当時のあたしは・・。日嗣の皇子があたしを求めたのは、旅の一夜の慰みだって事も分かっていたし、それに、かか様のようには為りたくなかった。

伊吹童子　それで。

山の井　あたしは故郷を棄てた。ほんとの名前もね。・・・後になって、後難を恐れた

村の皆に、爺様が八分にされ、飢え死んだって聞いたわ。・・・あたしは誰を恨めばいいの・・・。

伊吹童子　苦労したんだ・・。

山の井　分かったふうな口を利かないで。

伊吹童子　ごめん。

山の井　でも、これで未だあたしの心には血が通ってる事が分かったわ。人に踏み込まれれば血を流すんだって・・。愚痴ね、あたしとしたことが愚痴を言うなんてみっとも無い。

伊吹童子　言ってくれて有難う。少しはあんたに近づけたような気がする。

山の井　・・・・・・。

伊吹童子　腹が減った。私はどれ位眠ってたんだ。

山の井　二日。

伊吹童子　道理で腹も空くわけだ。

山の井　何か食べられる物を見て来よう。待っててておくれ。

山の井は、差し掛け小屋の灯りから小さなともし火を取ると、店に入って行く。

伊吹童子は、起き上がり、身体を動かしてみる。

物音を聞き付け、きっと闇を透かして身構える伊吹童子。近付く足音に、差し掛け小屋の陰に隠れる。

葦原を分けて九平太、茨木が、盗み出した贋金の袋を担いで登場する。

九平太　（担いだ袋を降ろしながら）やれやれ、肩に堪えたぜ。おい、あいつ等遅れているようだ。見て来い。

茨木が、同じように担いだ袋を降ろし、今来た道を戻る。

九平太は、取り合えず袋を店の裏口まで運び、筵の下に隠すと差し掛け小屋を覗く。

九平太　おや、居ねえな。何処へ行きやがった。

茨木が戻って来る。

九平太　どうした、来やがったか。

茨木、首を振る。

九平太　屋敷に忍び込み、盗み出すまではすんなりいったんだ。物(ぶつ)が重いんで舟で沼を渡る算段も良った。だから、途中で捕まる訳は無いんだ。

茨木　あいつ等だけにしたのが拙かったんじゃないか、ど素人だけを・・。

九平太　確かに。二手に分かれる時、俺もちらっと思わねぇでもなかったんだが・・。

茨木　どじを踏みやがったか・・・それとも・・。あいつ等信用ならねえ。なんせ素人だ、いざとなりゃ尻(けつ)を割るぜ。

九平太　分かっている。もう少し待ってみよう、馴れねえ舟で手間取ってるだけかも知れねえ。・・いずれにしても、事が終われば用済みだ。ずぶっとやってしまえ。（天を仰いで）おや、風が出てきやがった。妙な雲行きだ。こりゃあ嵐になるかも知れねえ。

頷く茨木。

店から、小さな器を持った山の井が登場。

山の井　戻ったね、首尾は・・。

九平太　上々と言いてえが、素人どもが遅れてやがる。（差し掛け小屋を指して）伊吹童子が居ねえがどうしたい。

山の井　嘘―ぅ。（小屋を覗いて）ほんとだ・・。

九平太　野郎気が付いたのか。

山の井　ええ、さっきね。お腹が減ったって言うものだから・・。

差し掛け小屋の陰から、伊吹童子が現れる。

伊吹童子　久し振りだな、屁垂れの九平太。礼を言うぜ、助けてくれて。

九平太　（突然、威儀を正して）これは若君様。ご無事で何よりで御座います。お体の具合は・・・。

山の井　（驚いて）若君だって・・・。

伊吹童子　この山の井の献身によって危ないところを逃れたようだ。

九平太　何よりで御座います。

茨木　兄者人・・・。

伊吹童子　おゝ、これは茨木。暫く見ぬ間に不敵な面構えになったな。思わぬ不覚で手傷を負い迷惑をかけた。さぞかし不甲斐ない兄と思うたであろう。

九平太　それより、見知らぬ男に伝言までして何故遅れられました。そちらの方が心配で御座いましたぞ。

伊吹童子　済まぬ。片付けねばならぬ急用が出来た。

九平太　また、女で御座いましょう。いい加減になさいませ女漁りは、悪い癖で御座いますぞ。

伊吹童子　最早、その心配は無用じゃ。

九平太　はぁ・・・。

伊吹童子　いや、よい。首尾は・・・。

九平太　盗みは首尾よくまいりました。銭は、後詰の者が舟で運んでおります。後はその到着を待つばかりで御座います。

伊吹童子　盗みが目的ではない。門閥の栄華を誇り、私利私欲の為に大胆にも御所近くで贋金を造る、高位高官の者どもの腐敗を暴くのが目的だ。そこの処を忘れるでないぞ。育ての親ばかりか実の親まで無残な死に追い遣られた恨みを晴らすのだ。

九平太　無論で御座います。育ての親柏原様の無念も忍ばれますが、実の親左大臣長屋王様の恨みを晴らさねばなりません。お互い顔も知らず、名乗り合えなかった親子とは謂え、お二人は今や左大臣様のお血脈を引く唯一の忘れ形見となられました。

山の井　（独白）おいおい・・嘘だろ・・左大臣の忘れ形見だって・・。

九平太　恨みは左大臣様ばかりでは御座いませぬ。思い起こせば、左大臣の父君　高市皇子は天武の大君の御子。天下分け目の壬申の大乱では、父君を補佐（たすけ）られ、援軍として馳せ参じた唐の大軍の先頭に立たれて、近江の輩と戦われた武勇の誉れ高いお方で御座います。しかしながら、母君様がまつろわぬ氏の上胸形君徳善（むなかたのきみとくぜん）の娘とて卑しめられ、土蜘蛛の血の混じる者として疎（うと）んじられ、悲運の裡に亡くなられました。恨みは此処より発しますぞ。

伊吹童子　うむ、分かっておる。

九平太　壬申の乱にて、天武の大君にお味方し、太宰府よりこの国に睨みを効かしておられた唐の全権大使　郭務宗（かくむそう）様は、高市皇子を哀れと思し召し、この国に残した唐の者共に、皇子を陰ながらお助けするように言い残されて帰国なされました。この言葉は連綿（れんめん）と生き続けております。ご存知の通り、左大臣様が伊吹の柏原の娘に貴方様方を授けられて以来、私がその役目を仰せ付かっております。

伊吹童子　我等兄弟、有り難き事と感謝しておる。

九平太　世を忍ぶ為の仮の姿とは謂え、身分を弁えぬ言動お赦し下さい。

茨木　兄者は、肩肘張って難しい事を言うが、なに我等とて土蜘蛛の子よ。恨みだ怨念だと常の世の事を持ち込む事は無い。窮屈（きゅうくつ）に為るだけだ。俺は若者らしく野放図に生きたい。それに、土蜘蛛には土蜘蛛の理屈がある。我等は、氏の上を崇め、仲間を裏切らず、正しい事を正しい事とすれば良いのだ。

伊吹童子　お前こそ難しい事を言う。正し事が正しいとされぬ世だからこそ一矢を報わねばならぬのだ。土蜘蛛とされた者にも土蜘蛛の意地があるわ。九平太、贋金の証しを暴き、左大臣の無念が、魂魄を此の世に留まらせて田の作物を枯らし、人々に疫病を齎（もたら）すと風説を流せ。

九平太　畏まって候。

茨木　けッ。芝居っ気たっぷりだ。

物陰より君足、旅人が登場する。

君足　伊吹童子、遂に本性を見定めたぞ。国家転覆の謀反の罪で死を賜った左大臣長屋王の落し子とな、不敵にも親子共々帝に仇なす者であったか。都の丑寅に妖しの者どもが群れ棲むとの噂を確かめんと遊客に身を窶（やつ）し、探索の甲斐あって思わぬ大物が網に掛かったわ。先夜は油断して取り逃がしたが、今夜はそうは参らぬ。既に、六衛府の衛士達がこの家を取り囲んでいるぞ。覚悟して大人しく縄につけ。

各所に松明の灯りが点り、舞台を明々と照らす。

伊吹童子達は、舞台中央に身を寄せ、君足と対峙する。

伊吹童子　笑止千万、育ての親に加え実の親まで手に掛けし重ね重ねの親の敵。のこのこと出てきおって、この場で我が父長屋王の恨みを晴らしてくれる。

君足　何を小癪な、返り討ちにしてくれるわ（太刀を抜いて）いざ、見参。

茨木　しゃらくせえ、手前が親分と仰ぐ右大臣は贋金造りの元締めだ。澄ました顔で、天下国家のとほざいてやがるが、懐に入れた手は汚れきってやがる。まさか手前の屋敷が狙われるなんぞとは思はねえで、油断してやがるから今夜忍び込んで、ごっそり頂戴してやったぞ。さぞかし高慢の鼻が折れた事だろう。

伊吹童子　我等兄弟力を合わせ、末代までも藤原一門に楯を突き、怨霊と為っても地獄の底に追い落としてくれるわ。

阿修羅の如く駆けつけてくる伊吹の弥三郎。

弥三郎　お待ち下され、若大将。

君足　何奴だ。

弥三郎　伊吹の弥三郎だ、柏原弥三郎を見忘れたか。

伊吹童子　遅かったな弥三郎。

弥三郎　面目次第も御座いません。しかし、斯(か)く参上仕った上は、若君様の仇、我が父伊吹の氏の上柏原の怨念を晴らすべく、この身命を投げ打って一戦仕りますぞ。怨敵君足見参。

君足　言わせて置けば猪口才な。皆の者、土蜘蛛どもを討ち取ってしまえ。

雷鳴と稲光。突然の豪雨。豪雨に消えていく松明。闇。再び稲妻に浮かび上がった伊吹童子と茨木、弥三郎は、鬼に変身している。

君足　（驚愕して）やゝ、鬼に成りおった！

斬り込む君足。立向かう伊吹童子、茨木、弥三郎。闇の中で、喚声、争闘の物音。稲妻の中で斬り結ぶ伊吹童子、君足。二人は奇怪な影となって稲妻に映し出される。　闇の中を、争闘の物音は遠ざかる。

闇の中に向いあって立つ九平太と旅人。

旅人　おい、屁垂れ殿。

九平太　何だ。

旅人　お前も大した盗人だ。長屋王ご落胤(らくいん)の守役なんぞと甘っちょろいお涙頂戴で、若造をころっと手玉に取っているが、儂の目は節穴じゃない。

九平太　変な事を言い出す爺だ。

旅人　あんな若造何処の馬の骨とも知れたものか。本人その気に為っているが、大方、頭の弱いぽっと出の田吾作に、有る事無い事吹き込んで誑(たぶらか)かし、長屋王のご落胤なんぞと、すっかりその気に仕立てあげたんだろう。

九平太　此れはまた異な事を聞く。聞き捨てならねえな。

旅人　お前さんの本心は、そんな事はどうでもいいのさ、長屋王だろうと藤原一族だろうと・・。肝心なのは、この国が産する純度の高い砂金や美しい砂鉄の利権を唐が失わないようにする事だ。唐が最も恐れるのは、この国がきちんとした法律の下、役人の組織を整備して、安定した社会を作る事。自分の権益を護れる国家を創られる事だ。そうなれば唐も易々と甘い汁は吸えなくなる。

九平太　大仰に御託を並べるがいったい何の事だ。俺は、ただの居酒屋の親爺だぜ。

旅人　いいや、お前の仕事は都に騒擾(そうじょう)を起こす事さ。唐がこの国の鼻面を牽き回し易いように、天変地異であれ疫病であれ、人々の心を蝕む嫉妬、憎悪であれ、あらゆるものを利用して不安で不安定な混乱を創り出す事だ。

九平太　あまり喋りが過ぎると命を落す事になるぜ。

旅人　牙を剥いたな屁垂れ殿。だが、今此処は六衛府の衛士達に囲まれている。立場を弁えた方が利巧だ。此処でお縄にしても良いが、それじゃ芸が無さ過ぎる。どうだ、ものは相談だが、お前の後ろ盾の唐の役人どもに儂を売り込まぬか。

九平太　なに・・唐に通じようと言うのか・・。

旅人　そうだ。土蜘蛛どもが如何程騒ごうと、これからは、長屋王を蹴落とした藤原の天下になる。得意の閨房戦略で帝も女共に雁字搦めにされ、手も足も出なくなってしまった。こうなれば、我が大伴一族が如何に旧家を誇ろうと明日の身は知れぬ。ひたすら藤原の鼻息を窺って生きねば為らぬのは必定。だから、いざという時の後ろ盾が欲しい。実はな、皇族でもない藤原不比等の娘を皇后にすると言う一件で、反対する長屋王の肩を持った儂を目障りだと追っ払う為、今回の除目で太宰府の師に任ずと言う内示が出る。儂はこれを逆手に取る積りだ。太宰府の師と言えば唐をはじめ外国との交渉役。此れを抱え込めるとあれば唐にとっても悪い話ではあるまい。

九平太　お前様も、相当な悪人・・。

旅人　奇麗事では生き残れぬわ。どうだ、この話仲立ちをすればお前の株も上がるであろう。

九平太　・・・一つ頼みがある。

旅人　何だ。

九平太　伊吹童子を逃がして欲しい。

旅人　まだ忠義立てか・・。しかし、逃してどうする。ここは、一思いに君足に殺させてしまった方が後腐れがないかも知れぬぞ。

九平太　いやいやさに有らず。まだまだ利用価値はあると見ている。捲土重来の時期に賭けてみたいのさ。

旅人　お主も物好きだな、だがそれも宜かろう。これで約定は成った。裏切るなよ。

九平太　　お互い悪人同士だ。約束は守るぜ。

雷鳴と稲妻の中、斬り結びながら伊吹童子と君足が登場する。長い争闘に疲れ果て、二人は、気息延々として殆ど倒れそうである。後を追って衛士追立てられるように茨木、弥三郎が登場。改めて激しい乱闘となり、弥三郎が伊吹童子を庇って獅子奮迅の働きをする。その戦いの中から、弾き出される様に君足がよろめき出て来ると、旅人が、後に回り抱き止める。

旅人　　しっかりせよ、君足殿。

君足　　此れは中納言様。ご助力下されるか・・。

旅人　　お主は口が軽い、何を喋られるか知れぬでな。

旅人は、君足を背後から刺し殺す。

旅人　　（九平太に）さあ、今の内に仲間を連れて逃散せよ。

九平太　　いずれ後日。

旅人　　楽しみにしている。往け。

九平太　　（伊吹童子に）一刻も早く伊吹の山へ・・。

九平太が、伊吹童子を助け、茨木を連れて退場しようとすると、衛士達がどっと討ちか

かり、乱闘の中で弥三郎が叫ぶ。

弥三郎　若君ここはお任せあって落ちられよ。（衛士達に）やあやあ我こそは音に聞こえし伊吹童子なるぞ、我が首取って功名手柄とせよ。

弥三郎は、衛士達の中に切り込んで行き、旅人が、小屋に火を放つ。乱闘の中、衛士が叫ぶ。

衛士　取ったぞ、伊吹童子を討ち取った！　一番首だ！

雷鳴と炎、黒煙の中に全ては覆い隠されていく。

旅人　（にんまりと笑って、独白）さて、炎が全てを覆い隠し、残された灰は何も語らぬ。全て事も無しじゃ。（衛士達に）六衛府の者共、引き上げじゃ。鬼共は、妖怪の本性を現わし、雲を掴んで中天高く逃げ去ったわ。

旅人、退場。

嵐は次第に静まり、燃え盛る酒肆。

沼から濡れ鼠になった憶良、行基、家麻呂が這う這うの態で登場。燃え盛る酒肆を呆然と見詰める。

行基　闇夜に道を失い・・・。

憶良　嵐で舟が沈み・・命からがら辿り着いたら・・・。

家麻呂　・・・燃えてる・・・・。

幕。

エピローグ

沼の辺の酒肆。焼け跡の残った柱に筵を掛けて日除けにし、人の暮らし始めている様子がある。葦原の焼け土の上に髑髏(されこうべ)が一つ置かれている。

柱に凭(もた)れてぼんやりと往来を眺めている憶良。鼻唄交じりで焼け跡を掘り返している行基。

行基　贋金とは謂え、こうして掘り返して探すとなると一枚でも多くと願ってしまう。これも欲かの。

憶良　人情だて・・。

行基　それにしても、大方の銭を沼に沈めてしもうた。勿体無(もったいな)い事をしたものよ。あの銭があれば、役人の苛烈(かれつ)な頚木(くびき)を逃れ山野に隠れた者達を救う事が出来たであろうに・・。

憶良　儂とて、その筋に賂(まいない)して今頃はどこぞの国司として美々しく旅立ちの準備をしていたやも知れぬ。しかし、あの時は突然の嵐で、突風に煽られて舟が沈み、闇の中岸に泳ぎ着くので精一杯であった。

行基　それも小屋の燃える明かりが見えねばどちらへ泳いで良いかも分からなかったぞ。思えば、我等の煩悩の暗夜を照らす法燈のようであった・・・。

憶良　確かに・・(ぶるぶると身を震わせて)あの明かりが無ければ命を落としていたであろうな。

行基　それにしてもあの銭は惜しい事をした。

憶良　全くだ。

行基　銭と共に屁垂れの九平太も伊吹童子も、杳として行方が知れぬ。茨木や弥三郎の姿も見えぬ。あの者たちも業の深い生まれであったな。

憶良　中臣君足に率いられた六衛府の衛士に囲まれ、小屋と共に焼け死んだと言う噂もあるが・・。

行基　焼け跡から出た髑髏はあれ一つ。（片手拝みに合掌する）南無頓証菩提。

憶良　君足を攫って伊吹の山に逃げ帰ったとの噂もある・・。何れが真か・・。

行基　詮索しても詮無（せんな）い事よ。全てが振り出しに戻ったが、所詮頼りになるは己一人、己一人を頼りに生きて行かねばならぬ。（銭を見つけて）おゝ、また在った。

憶良　これからどうする・・。

行基　また、どこぞの新たな金主を見つけて誑かさねば為るまい。くよくよしてもはじまらぬ。建前で言えば、「虐（しいた）げられた民草の為に、野に伏し、辻に立ちて仏を説き、橋を架け道を拓くのが俺の仕事だ。何時の日か、逃散し山野に隠れる民が堂々と都大路を歩けるような時代を創って見せるぞ。」というところだ。

憶良　本音は。

行基　「糞ったれ、負けてたまるか。俺は行基様だ、行基の生き様を見せてくれる」ってとこか。取り敢えずは、疲弊した民の魂を癒す小さな庵を造る事からでも始めようか・・。天に聳（そび）える廟堂（びょうどう）も、輝く甍（いらか）も民の支えとはならぬ、仏

は名も無い路傍の草木に宿るのよ・・。

憶良　お主はまだ若い。遣りたい事、遣らねば為らぬ事、まだまだ先に希望が持てる。それに較べ儂はもう後が無い。今度の事が、最後の機会だと思っていた。しかし、物事は思いの侭には為らぬものよのう。

行基　何を弱気な。まだまだ此れからで御座る。（焼け跡から抜け出して、身繕いする）拙僧と一緒に参られませぬか。貴方には、野に伏す民の声なき声を歌にする才能がある。

憶良　歌か・・。

行基　左様、歌を武器にされる事だ。歌で此の世の矛盾を暴き、虐げられた者達と共に闘い、泣き、笑い、そして旨い酒を呑もうではないか。歌で人の心を打つのに中納言も従五位もあるまい。身分も官位も関係無いぞ。

憶良　儂は役人としてしか生きられぬ男だ。

行基　盗賊の仲間になったではないか。

憶良　あれとて、国司になりたいが為だ。

行基　少しばかり見方を変えれば、世の中の見え方も違って来ますぞ。

憶良　気持ちは有り難いが、そうも参らぬ。生き方を変えようと試みてみたが、失敗に終わった。最早、やり直しの効かぬ歳よ。

行基　残念だが・・・それではさらばで御座います。

憶良　もう往かれるか。

行基　はい。

憶良　達者で・・。

行基　御覧なさいあの沼を。何事も無かった様に静まり返っているが、この都の欲望と汚物を飲み込んで益々膨れ上がっています。今に溢れ出ますぞ。溢れ出てこの都を巨大な糞溜と化して滅亡させます。糞溜、所詮は糞溜めだ！しかし、それに気付いている者は少ない。気付いてしまったと言うのも、身の不運。糞が流れ、都が汚物の底に沈まぬように川を浚(さら)い、土手を築かねば為らぬ。いずれどこぞの橋の袂(たもと)で再び相見える日があるやも知れませぬ。その日を楽しみに致しましょう。

哄笑しながら行基は旅立つ。見送る憶良。入れ違いに、野の花を摘んだ花束を持って山の井が登場。焼け土の髑髏に供える。

憶良　供養をされるのか。

山の井　誰とも知れませぬが、何れ縁(えにし)の在った人でしょう。野晒(のざら)しにするのも忍びませぬ。手を貸して頂けませぬか。

二人は、髑髏をそっと埋め、手向(たむ)けをする。

憶良　何時までも此処に居る訳にもいかぬ。お主、行く宛てはあるのか。

山の井　さあ、宛てといっても・・・。故郷も身内も棄てた女ですから・・。

憶良　九平太の後を追わぬのか。

山の井　行方も知れません、何時もそうなんです。それでいて思いがけぬ時に不意に現れる、そんな男なんです、あの人は・・・。そうだ、伊吹のお山にでも行ってみようかしら。

憶良　伊吹童子か。

山の井　ええ、どんな処で生まれ育ったか、見てみたい気もします。

憶良　惚れたのか。

山の井　そんな。歳が違いますよ、親子ほど・・・。

憶良　・・・伊吹の山は、もう秋風が立ち始めたかも知れぬ。

山の井　そうですね、この沼の辺りでさえ、暑さの盛りも過ぎてめっきり日暮れが近くなりましたから・・。貴方様は、如何為さいます。

憶良　儂か・・・儂はまた、せっせと中納言様に歌を贈るよ。太宰府の師として彼の地に旅立たれるそうだが、儂の事をお忘れに為らぬよう、歌を創って贈り続ける積りだ。何せ、まだ乳を欲しがる赤子がおるでな。餓えさせる訳には参らぬ。（独白）だが、この度の事で、儂の心には山犬が棲みつき始めた。何時か牙を剥くに違いない。それまでは猫を被って置く事だ・・・。（膝を打って）ひょんな拍子に歌を思いついた。

山の井　歌で御座いますか。

憶良　そうよ、予てより思い煩っていた貧窮問答の結びの歌を思いついたのよ。

山の井　どのような歌で御座いましょう。

憶良　聞いてくれるか・・。

山の井　はい。

憶良　今一度調子を整えねばな。・・・えーと、うん、そうだ。（咳払いをして）参るぞ、・・「世の中を　厭しとやさしと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば・・・飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば」。

山の井　なにやら哀しげな・・。

憶良　うん。・・・哀しいのう、歳をとるのは・・若い時は気にも掛けなかったような事が心を重くする。最早行く末が見えているのだ。諦めねばならぬ。だが、心には沸沸と滾（たぎ）りたつものが残っておる。世の中に己の才能を認めさせたい、己が居た証しを刻み残したい。だが、飛立てぬ・・・。それにしても、歳をとるほどに時の経つのが早くなる・・。（辺りを見回して）夏も盛りを過ぎたか。盛りを過ぎると季節の移ろいは早いものだ。

山の井　ほんに、沼の水面も夕日に映えて黄金色に輝いていますが、秋の陽は釣瓶（つるべ）落としとか・・・。そろそろ日も暮れかけて来ました。参りましょうか。

憶良　名残り惜しい気もするが、留まる事も出来ぬでな。しかし、こうして沼を眺めていると、行基の言った事が何時か本当になるような気がしてきた。

山の井　どのような・・。

憶良　沼が溢れてこの都を滅ぼすと言うのだ。確かに水嵩が増したようにも思える。人々の生きた証しが、この沼に流れ込んで沈殿し、積り積もるのかも知れぬ。そして、沼は何時か吐け口を求めるに違いない・・。

二人は、退場する。それを見届けるように、燃え残った葦原から家麻呂とその妻が顔を出す。

家麻呂　行ったか。

妻　ええ、行っちゃったよ。でも思い出した、あの女何処かで見た女だとは思っていたが、ありゃあ、あんた、私が生まれた在所の胸形のお屋敷の姫様だよ。日嗣の皇子に見初められたの、騙されたのってえらい騒ぎだったが、ある日ふと姿が見えなくなって・・・・こんな所で出会うなんて、ああ驚いた。それにしてもえらく変わったもんだ、ちょっと見じゃまるっきり分からないもんね。

家麻呂　しぃーっ。まだ大きな声を出すんじゃない。

妻　どうしたと言うのさ。さっきだって、私がやっとお前様を見つけたと言うのに、いきなり葦原に引きずり込むんだもの。びっくりしたよ。

家麻呂　あいつ等に見付かりたくないんだ。

妻　どうしてさ、訳をお言いよ。（はっと思いあたって、恥ずかしそうに）あっ、嫌だ。幾ら久し振りだって、こんな所で・・・。

家麻呂　馬鹿、何を勘違いしてやがる。そんなんじゃない。

妻　じゃあ何だって言うんだい。

家麻呂　あいつ等に聞かれたくない事があるんだ。

妻　何だねそれは・・。

家麻呂　それよか、何だって在所を出てきた。家はどうした・・。

妻　よくそんな事が言えるもんだ。いつもなら帰って来る日に帰って来ないし、幾ら手紙を出してもうんともすんとも言って来ないじゃないか。心配で心配で、居ても立っても居られないから、子供を爺様、婆様に頼んで思い切って出て来たんだ。あんたこそ何してたんだ。お邸に行ってみれば潰れてて人っ子一人居ないし、人伝に彼方此方探してもあんたの姿は見付かりやしない。脚を棒にしてどれだけ探した事か・・。

家麻呂　おゝそうか、それは済まぬ事をした。

妻　それにさ、息子だって早いもので役人にするんなら、もうその伝(つて)を探さなきゃならない歳になったし・・それやこれやあんたに相談しなきゃならない事ばかりなんだもん・・。

家麻呂　いや、話せば長い事なんだが、色々有ってな。お前も既に聞いているだろうが、謀反の罪を被せられて旦那様が自殺して、屋敷は潰れ、俺もお払い箱になっちまった。仕方ないんで故郷(くに)へ帰ろうとこれまで貯めた全財産を背負って夜道を急いでいたら、伊吹の弥三郎という山賊に捕まってしまった。

妻　えぇーッ。

家麻呂　此れがまた、熊と素舞を取ると言う鬼のような大男でな。言う事をきけってんで、全財産の入った荷物を取り上げられちまった。

妻　そりゃ大変だ・・それで荷物は。

家麻呂　そいつがなけりゃ故郷(こきょう)にも帰れないし、お前に合わす顔も無いから渋々言う

事をきいたら、使い走りはさせられるわ、盗人の手引きはさせられるわ、挙句の果てに舟が沈んで半死半生の目に合わされるわで、振り回されてしまった。

妻　そンな事があったなんて、ちっとも知らなかったよ。どうして早く言ってくれないのさ・・・(強調して)で、荷物は・・。

家麻呂　返して呉れるって約束だったが、あんなこんなの大騒動で、山賊共は行方知れず、どうなる事やら・・。

妻　どうなる事やらって、頼りないね。しっかりしておくれよ。在所じゃ、爺様、婆様が口減らしの為に山に棄ててくれろと毎日泣いているんですよ。そこにもってきて育ち盛りの子供達が口を開けてるんですからね・・。

家麻呂　分かっている。だから、俺だって苦労したんだ。

妻　でも、荷物は取り戻せなかったんでしょう・・。

家麻呂　大きな声を出すなってとこは、そこのところよ。

妻　えっ、どこよ。

家麻呂　いいか、俺も考えたんだ。荷物を取り戻すのは無理じゃないかってな。そうだろう、世の中、一遍(いっぺん)取り上げた荷物を約束だからっておめおめ返すような山賊は居ないものな。そこでだ・・別の方法で取り戻す事を考えた。

妻　別の方法・・早くお言いな。

家麻呂　驚くなよ、ごまんと言う銭があの沼に沈んでいる。俺はその場所を知っているんだ。

妻　ほ、本当かい・・。

家麻呂　本当だとも。嵐で舟が沈んだと言ったが、そうじゃないのさ。嵐を幸い、俺が舟底の栓を抜いたんだ。その時、後々の為に目印として銭の袋に舟の櫂を結び付けておいたのだ。今朝見たら目星を付けた処にちゃんと在ったぜ。

妻　何だか事情が分からない所もあるが、取り合えずあたし達は大金持ちて事かい・・。

家麻呂　そうだ。但し、贋金だがな。

妻　使えるんだろ・・。

家麻呂　少しづつ、ちびちび使えば分かりゃしないさ。

妻　どうしよう・・。

家麻呂　在所で銭なんぞ使えば目立ってしょうがない。銭を使うなら都だ。爺さん婆さんを言い包(くる)め、子供達を連れて夜逃げして来よう。幸い此処は元から店の在った場所だ。此処に新しい店をこさえて暮らそうじゃないか。

妻　・・そうだね、・・・そうしようか。

家麻呂　宮仕えはもう真っ平だ。これからは、人の為じゃなく己の為にだけ働くのだ。

妻　なんたって、家族が一ッ処で暮らせるのが一番だね。

家麻呂　そうさ。だがこれで、俺達も故郷(くに)を棄て、名も棄てて暮らさなきゃならない。常の世から姿を隠した山沢亡命の徒になっちまった訳だ。

妻　良いじゃないか、お上が私達の為に何かをしてくれる訳じゃなし。それに、もう後戻りは出来ないんだ、前を向いて行こうじゃないか。(焼け跡に向って)

さあ、そうと決れば、まず此処を片付けなくちゃ・・。

二人は、夕闇の迫る中、焼け跡を片付け始める。

幕。